

# ブラジルの 大地に生きて

広田亜起 文集

---

The Autobiography of  
Aki Hirota

---

ブラジル日系二世が  
つづった「女の一生」



著：広田亜起

ブラジルの大地に生きて

ひろたあき  
広田亜起

ぶんしゅう  
文集

# もくじ

第一章	私の生い立ち	4
第二章	楽しい団体旅行	20
第三章	日本での代筆	26
第四章	一行八人のブラジル訪問	28
第五章	冥土みやげ	38
第六章	我が家の娘	52
第七章	二〇〇九年母の日	58
第八章	孫の成人祝い(1)	60
第九章	人生半分	64
第十章	S先生のお別れパーティー	70
第十一章	二〇一一年母の日	74

第十二章	「弔辞」友人代表	82
第十三章	第一アリアンサ八八年祭	84
第十四章	古希のお祝い	94
第十五章	よし子おばさまの九〇才お祝い	98
第十六章	孫の成人祝い(2)	100
第十七章	母の日	102
第十八章	父の日	106
第十九章	金婚祝い	110
第二十章	言葉づかい	114
第二十一章	私たちの誕生日	118
第二十二章	秋彦さんへ	122

## 第一章

### 私の生い立ち

私が生まれて育った所……。私はプロミソンで生まれ、ミランドポリスの町で育ったと聞いている。父母はよく、「アキはコロニヨン畑の中で生まれた」と言っていた。生後間もなくミランドポリスの町に引越したらしいが、「コロニヨン……」と言われても何の事かも知らないまま成長した。引越しの時、汽車「マリヤ・フマッサ」から父母は赤子の私を抱いてミランドポリスの駅に降り立った。駅で出迎えた「よまさ くらお」さんが今でも私に話してくれるのは、「アキちゃんはおれが助けてやったんだ……」。というの、母が汽車から降りるとき、つまづいて危なかった。そのとき赤子の私を母の手から抱きとったという。

父の話では、私は大変泣き虫だった。三〜四才頃の私は豚の脂(Tresno)の大きなかたまりさえ持たせれば、それをしゃぶって黙ったそうで、今でも肉類はたっぷり脂がのつた部分を選び、特に牛より豚が大好物。もう一つ父が口ぐせのように言っていたことは、「アキがいちばん泣きむしであまえんぼうで、おくびようで、いつも母にしがみついている

た。そしていちばん母乳を飲んだ子だ」。なのに兄弟姉妹のうちでいちばん小さくてか細い。亡き姉は背が高くいい体格をしていた。妹も私の倍ほど体格がいい。泣きむしの私は五つの時にバルクラルの学校に入学したというが、そんな覚えなどまったたくなく、おんちのせいかわ物心つき始めたのは六才頃からと思う。母が毎日、小さなびんにあつたかい牛乳とサンドイッチを持たせてくれ、一人でめそめそ泣きながら学校へ通つたことは記憶にある。ある日は土砂降りの後、ごうごう流れるどぶ水にはまり、靴をとられわあわあ泣いて帰つたことなど。今は記憶を懐かしむばかり。私は小さい時から交遊が苦手で女の子やら男の子が大勢兄や姉と遊びに来て、キヤーキヤーにぎやかに家のまわりをはしやぎまわっているのに、私だけがいつもベッドの下の暗い隅っこに隠れてしまい、何時間たつてもその子らが帰るまで出てこない妙な子だった。「そんなことではだめだ」と口うるさく父に叱られた。生まれながらの性格はかわらず、今でも出不精。かと言って狭い考えを持つでもなく、すばらしい毎日が見えないわけでもない。井の中の蛙ではつまらないと思うこともある。どんどん日がたち、どんどん老いぼれるのだから、早く少し日向へ出ればいいのだが。出不精は母ゆずり。母はどこにも出ず、コツコツ働く一方だった。子だ

くさんで、けっして豊かな暮らしではなかったが、飢えをしのぐようなひもじい思いを  
ぜったいさせなかった父母を今でも心から尊敬する。父は唄が生き甲斐かのように、あの  
当時からすばらしい大きなアパレリオ・デ・ソンを手にし、ベートーベンのクラシック  
音楽とか唱歌、流行歌、童謡、そのほかさまざまな曲を聴き、美声で唄いこなしもした人  
である。私たち子供にも童謡を教えてくれた。小さい時から私はこまっちゃくれ、「あか  
ぎの子守歌」とか「上海帰りのリル」など大人の唄を父といっしよに唄ったものだ。父はま  
た、読書が好きで文芸春秋とかリーダーダス・ダイジエストとかむずかしい本を食事中に読  
んでいた。「食事の時ぐらいやめといて」と母に小言を言われていたのが今でも目に浮か  
ぶ。しかし父もよく働いた人だったので食事どきぐらいしか読むひまがなかったのだろう。  
父は子煩悩で、私たちが大きくなるまでお風呂で身体を洗ってくれた。頭を洗ってくれる  
とき私はめそめそ泣いた。今思うと、どうしてあんなに泣いたのだろう。

私が六、七才の頃、よく父は車で最初の入植地アリアンサに車で連れて行ってくれた。  
アリアンサ北米区のおばあちゃんの家、第一アリアンサの馬場さん、瀬下さん、しんせい  
農場、弓場農場によくつれていってくれた。そんなある日、瀬下さんのパストの中で野生

のゴヤバを無意識に食べ過ぎた私は、おなかをこわした。北米区のおばあちゃんの家では、畑中かけずりまわり、カハピツシヨのとげが足の小指にささり、化膿したため、もものつけねまで真っ赤にポンポンに腫れ上がり高熱にうなされ、もりべドットル(医師)に小指を切ってもらって、とげをとりのぞいたり痛い思い出もある。

その頃、ミランドポリス・クリニカ病院近くの会館では、かとう先生ご夫妻による踊りのけいこが盛んで、「チコチコクラブ」の大勢の女の子たちが稽古に励んだ。なかでも私がいちばん幼かった。今でもその古びた会館のそばを通ると懐かしくて「あゝ私の子ども時代……」なんて思わず思わず泣いてしまう。そのすぐ横は野球場で父がいつも指導をしていた。私たちの子供時代、父はあみくらさんのオフィシーナに就職していた。母が作ったあつたかいお弁当と、父の大好物のコーヒーを入れた大きなやかんを下げ、裸足で毎日届けにいった。裸足で歩くのはみつともないから止めなさいと母にいわれてもやめなかった。ある日、お日さんで焼けたカルサーダにたはこの火のこを踏んだときの痛さは忘れられない。それでも今も裸足でいるのが何より気持ちがいい。幼い私には、大きなやかんとお弁当は重かったが、その時父が買ってくれるアイスクリームがうれしくて、昔は放し飼

いだった羊に追いかけられたり、犬に食いつかれながらオフィーナへ足を運んだ。父はとてもやさしかった。いつも私たちをかわいがってくれた。町に行くと今でも父を偲んで大好きなアイスクリームをいただいで帰る。

ある日、父がオフィーナで車の下にもぐり、修理をしているところへ大きなトラックが飛び込んでぶつかかった。みるみる現場は血の海。父は重体で入院し、危篤状態だった。トラックを運転していたのはブラジル人だった。四か月半入院している間ずっと毎日見舞いに来て、そのたびに申しわけないことをしたとていねいに頭を下げ、逆に気のどくだった。退院後もよくなるまで、毎日家に来てくれた。今ごろは人間を轢き殺そうと犬や猫を轢いたような涼しい顔をして冷たく逃げ、義理も人情もあつたものではない。昔の方が人間があつたかかった。父は背中に二五センチのかなり大きな深い傷を負つたが命だけはひろつた。しかしその後、その仕事ができなくなり、すっかり回復するまで約二年かかった。

もともと第一アリアンサへ入植した父だったので、そこからもつと奥地の第三アリアンサへ引越することになった。それは私が九才になったばかりだった。十才の兄、六才の弟、四才の妹、一番上の兄と姉は中学のためミランドポリスの町に残った。父はまだ

無理ができず、働き手は母一人だった。母にはどんなにか苦勞、過勞の毎日だったか。小さな母さんが哀れだった。父母ともにお互い野良仕事は身につけていたものの、第三アリアンサへ転居した時の、それはすごい背丈のコロニヨン畑を耕し綿作り。それしか方法がなかった。大きなけが傷から漸く快方したばかりの父、そして私たちチビ四人をかかえ、母は無我夢中の毎日だったろう。そんな状況で、私は九才のときから炊事・洗濯を任せられた。とりわけ小さい私に、父が流しやかまど洗濯場に、少し高めの台を作ってくれた。私の家事手伝いが始まったのだった。一度だけとお米をといで水を加えるのを忘れて炊いてしまった。あの焦げの匂いはごまかすこともうそれを言うこともできず畑じゅうにひろがった。貧しい生活で毎日マンジヨカをごはんといっしょに炊いた。小さい私にはあの硬いつるつるすべるマンジヨカをみじん切りにするのが大困難だった。危なっかしい手つきで、指を切ったりもした。そんな幼稚な料理を父はいつも「おいしいおいしい」と、私を慰めるために褒めてくれた。父のそんな気持ち、思いやりを思うと、涙がこみ上げてくる。毎日のごはん炊き仕事、小さいわたしには辛かったが、必要に迫られ、母のお手伝いをしているうちに炊事が好きになった。おかげで経験を積むことができ、人並みにお料理が

できるようになり、つらかったことは無駄ではなかった。アイスクリームも餡玉の一つもない奥地に引越した父は、私たちチビを不憚に思い、お玉杓子に砂糖をいれ、燻きの上で煮とかし、じゅうそうをほんのちよっぴり入れ、かき混ぜたものをよく食べさせてくれた。杓子が一つしかないので、小さい子からで、四人の私たちチビは順番が待ち遠しかった。一つ年上の兄も、まだ無理ができない父も、母の手伝いをしたが、生活は苦しかった。コロニヨンほどに私の背が高かったら、もつとお手伝いのできていいのになと子供ながら思った。昔のことだから小さな家は一面のコロニヨン畑にとっぷり覆われていた。その中で仕事をしてくれる馬も二頭大事に飼っていた。そんなある日ジエラルド・ブラガのファゼンダからの飛び火で火事になった。立派だったコロニヨン畑が見るうちに見渡す限り焼け野原に変わっていった。我が家の綿畑も全焼した。被害は村中だった。牛のように大きなお隣の豚たちがマンゲイロン焼かれ、ごろごろ逃げはじめた。村中どこもかしこも全焼した。当時サツペの屋根だった我が家は父母がいつしうけんめいありつたけのシーツや毛布をかけて水でぬらし、屋根を蔽ったので不幸中の幸い、焼け残った。当時井戸はつるべで水揚げが大変だった。さぞかし必死だったろうと思う。神様は私たちを守ってく

れた。馬は、ちょうどその日、一番上の兄が町から父たちの様子をうかがいに来てくれていて、コロニヨン畑の中を必死で探し回り、やっとのことで見つけ出してくれた。かわいそうな馬たちは、食べるものさえなくなつた。全焼したマンジヨカ畑も土の中の芋は助かつたのでそれで餌を補つた。私たちは学校へ行つたので、授業が終わつて校舎を出るなり家の方向に上がる真っ黒な煙に気づき、帰途四キロ、一目散にかけた。あともう少しの所まで来ると、もうすでにうちの庭が焼け野原になつて見えた。家だけがぼつんと立っていて、その周りにはあちことまだ煙が上がっていた。いっしょうけんめい火消しをしている父の姿は見えたが…、母は？、母はどうしたの？。とにかく家まで辿り着こうと、なお一層めらめら燃え上がる火が、うちと村井さんの境を越そうとしていた。私たちはそれを突つ走ろうとした。そのとき、火消しに総出の村の人たちにどなりつけられて止められた。火はそこでいったん収まつたが、しばらくすると、風をさそつてとんでもない遠い小林さん側のマットから火が上がりはじめた。

こうして、学童時代、<sup>1</sup>一年と<sup>2</sup>二年生は町で、<sup>3</sup>三年<sup>4</sup>四年生は第三アリアンサで、なれない町の子らが、いきなり往復八キロを歩く辛さは身にしてみた。<sup>4</sup>がついた。つまり「四月バカ」

ひにわたしは転校してきたので、入学そうそうからかわれた。私はどのクラスへ行ってもいちばん小さいので、ここでも列に並ぶときはナンバーワン。名前もアキの、シャマードするときもナンバーワン。成績もナンバーワンだったらよかったが、それは残念ながら…。とにかく八キロを雨・風・暑さ・寒さ、時には嵐をのり越えて、気が遠くなりそうになりながら通った。夏は焦げるような、じりじり焼け付く砂が靴の中に入る。冬は唇が凍るような寒さの中、暗いうちに下げランプを持って家を出て、途中で明るくなってきたら草むらにランプを隠して学校に通った。学校帰りは、まさごさんあたりのパストでマカウバ、小林さんのマットではジャトバの実拾いを競っているうちに、草むらに隠したランプを忘れて帰り、親に叱られたりした。辛かったが、楽しくもあった二年間だった。あの当時田舎の生徒たちはみなこれくらい苦労はしていた。それを今の子らに話すと、「マイ エスタ ナ エラー ド ドン ベードロ」と言っつて、耳をかたむけようとした。第三アリアンサでは、父は綿の消毒薬にやられ、綿つくりをやめることになった。私が卒業してまもなく第一アリアンサ北米区に引越し、おじいちゃん、「母の義父」のカフェーザルの仕事をし生活をした。私は炊事、洗濯そしてカフェーザルのお手伝いもする

ことになった。どちらかというところ、母は野良仕事の方がよほどいいかのようになり、炊事はあまり好きではなかった。でもしかし、そんな母だったからこそ、私たちはたくましく大きく育った。子を育てるためにだけ生きたお母さん……ほんとうに心から感謝です。母はカフェザールの草取をしながら、いつも幸せそうに唱歌を歌っていた。母もたいへん歌が好きだった。私も母と並んで草取りをしながら、特に私が好きだった♪「あかい月夜の浜辺には、親をさがして泣く鳥の……」を歌った。私は小さい時からふるさとの歌とか、父母の歌が好きだった。そして、カフェの収穫の時など、小さな棒でポンポン実をたたき落としながら、ひばりちゃんの歌をありったけの声でヤッホーヤッホーと歌うと山の彼方から山彦が返事をしてくれた。今はなつかしい山彦を聞くことさえなくなつた。

その頃、いちばんの兄と姉は大都会サンパウロへ出ていき、姉は「いいだ」さんの店、兄は外国取り引きの金属加工の工場に勤め、できあがった機械などを病院又は事務所などにも据え付けにいたりしながら大学へ通つた。ある日、社長に「仕事のできる弟はいないか」と聞かれ、兄は「いるけどまだたつたの十四才だよ」と答えた。社長は「いいから連れてきてくれ、出て行つた人の給料をそのままあげるから、ぜひ連れてきてくれ」と言

うので、兄あにがそのことを手紙てがみに書いて父ちちに送おくってきた。「Tempo E Dinheiro」というよう  
なせちがらい世よの中に手紙てがみとは気きの長い話はなしだ。しかし、あの頃ころは普通ふつうの家庭かていには電話でんわなど  
なかった。父ちちは兄あにに「こんなところにおいても将来性しやうらいせいはない。カフエーザルもはかばかしく  
ないし、お前まえたちを上うえの学校がっこうにやることもできない。せつかく言いってくれてるんだから、  
行いった方がほういい」と言いって、いやがる兄あにを追おい出だすように都会とかいへ送おくった。兄あにはめそめそ泣な  
きながら出でて行いった。十四才14さいといえばまだ子供こどもだった。大学だいがくを出でてもいないのにパトロン  
は兄あにを使つかってくれた。父ちちは私わたしにも都会とかいへ出でるように勸すすめた。私わたしは十三才13だった。土地とちが悪わる  
く、作物さくもつがまともに採とれず、父ちちはいらいらしていた。私わたしは「都会とかいなんか行くのいやだ」と泣な  
いた。実際じつさい知らない都会とかいで親おやと離はなれて暮くらすのが怖こわかった。あの頃ころの私わたしをテーマにした私わたし  
の作詞さくし

月 私わたしのふるさと

一、野のに咲さく名なもない 花はなだから

私わたしは涙なみださえ かわくのね

都会<sup>とかい</sup>なんて 行き<sup>い</sup>ません

田舎<sup>いなか</sup>で 暮<sup>く</sup>らします

幸<sup>しあわ</sup>せよ 幸<sup>しあわ</sup>せよ ここがふるさと

春<sup>はる</sup>まだ浅<sup>あさ</sup>い アリアンサ村<sup>むら</sup>よ

二、コーヒーの花<sup>はな</sup>咲<sup>さ</sup>く 頃<sup>ころ</sup>でした

はじめ<sup>は</sup>めてこの村<sup>むら</sup>に であつたのは

空<sup>そら</sup>に浮<sup>う</sup>かぶ 白<sup>しろ</sup>い雲<sup>くも</sup>

ひとり<sup>ひ</sup>りで 追<sup>お</sup>いかける

幸<sup>しあわ</sup>せよ 幸<sup>しあわ</sup>せよ 今<sup>いま</sup>はつらいけど

いつか花<sup>はな</sup>咲<sup>さ</sup>く アリアンサ村<sup>むら</sup>よ

三、どこか<sup>どこ</sup>はかなく そつと咲<sup>さ</sup>いた

赤<sup>あか</sup>い野<sup>の</sup>の花<sup>はな</sup>の 運<sup>さだめ</sup>命<sup>めい</sup>なら

遙か彼方 虹の色

ひとりで 眺めてる

幸せよ 幸せよ つらい暮らしでも

夢は花咲く アリアンサ村よ

十四才のころ、第三アリアンサの森花おばさまの所へ裁縫の勉強に行かされた。親と離れたことがなかった私は、あふれる涙で帰っていくバスを見送った。それから何日も、こみあげる寂しさに、声をこらして泣いた。

第三アリアンサの丸山さんのジャルジネイラ(Ⅱバス)が今も目に浮かぶ。ヨシダのだいちゃんのコブラドルしていた。丸山さんは大変お酒好きで、よく酔っ払い運転をし、乗っているのがこわかった。父がミランドポリスに行った日など、なおさら良い機嫌で飲んでしまい、トラックの運転に慣れていた父がジャルジネイラを運転して帰ったこともよくあった。当時、北米区から第三アリアンサまで往復八キロある道のりを歩いて映画を見にいったことも思い出す。おおぜいの友と話をしながら歩くのが楽しく遠さなど苦になら

なかつた。弓場農場が映画を映しに来てくれたが、アスファルト舗装はまだなく、でこぼこ道をトラクターで機材を運んできた。子供のころ、人が来るといつもベッドの下に隠れた私は、その頃から少しずつ他人と交わることができるようになり、周りのいろんなことに気が付き始めた。青春時代の入り口だった。そのころ北米区には十四家族も住んでおり、みんな子でくさんで大変賑やかだった。北米区の青年会はかなりの人数であった。公会堂もあり、毎年、新年会、復活祭、クリスマス、など盛大に行い、叔母のやまざきみつえ様がいつも踊りのけいこをを子供たちにしてきていた。しょうじょうじのためきばやしのおけいこの時、ポンポポンのポンポンが、動作ののろい私にできず。今思い出すとおかしくてふき出してしまふ。クリスマスには広田のじいちゃんがサンタ・クロースを演じたりしていた。バスケットのカンポも当時、エンシヤドン、スコップ、一輪車で場所を平らにわれわれ青年が総出で作り上げ、その他いろいろなスポーツも盛んだった。大泉みどりさんはバスケットがすばらしかった。私は走るのは不得手だったが、ピンポン、「テニス・デ・メーザ」は得意だった。のど自慢も盛んでみぞがみてつじさんはいつもトップ歌手だった。あの時代からバレエもときどきあった。この友だちがどこで暮らしているかはちらっ

と聞いてはいるが、ちつとも会うことなく、懐かしい「友」だちだ。そんな私たちにとつて、あれは最高の時代だった。二度とあんないい時代は帰って来るまい。日本語も一ヶ月交代で生徒たちの親が先生を務める夜学があつたが、私は夜一人で通うのが怖くて、日本語はまったく学ばなかつた。

十六才の頃、同じ北米区のコバヤシさんの所へ引越し、そこではひじょうに土地がよく、父は元氣が出てきた。末の妹が都会へ中学に行くことになった。六人兄弟だつた私たちはそれぞれ自分の道を未来へと巣立ちしていった。親元には私と弟が残つた。四年後少しの余裕がやつとできて、第一アリアンサ中央区に小さな土地をもうけ、父母、弟とまったく経験のない養鶏業が始まつた。私は結婚し北米区に残つた。しかし母は不運にみまわれた。毎日の頭痛の原因がペルキンソン病と医師に診断され、耳も心ももたえる苦しみの日々が続いた。思わぬ病症に負けず挫けず病氣と闘う母が気の毒だつた。私は姑の手前、ちつとも母を見舞うことが許されず、身を削つて育ててくれた母に何一つしてあげられず、今でも弱かつた自分を責め、許せず、氣をもたえる。母の手のふるえが増し卵の選別さえ困難になつてきた。病状は悪化し、容赦なく進んだ。父は養鶏業を私に託し、

母の治療のために大都会サンパウロに出ることにした。私は広田家十二人の家族と十一  
年暮らしたが、夫と子供たちを連れて父の残した家に入り、養鶏業を継ぐことになった。  
子供たちはまだ小さく、夫は養鶏業を手伝う気などさらさらなく、不安でいっぱいだった  
が、弱音を吐いていられる状況ではなかった。心機一転、私は養鶏業に立ち向かった。「や  
る気さえあればやれるはずだ」と自分に言い聞かせながら、四人の子供たちの世話をしつ  
つ、雛を含めて一万羽の鶏たちの面倒をみることになった。毎日朝まだ暗い四時から餌を  
与え、日が昇るころ家に帰って子供たちに朝食を与え、学校に送り出したら鶏舎に帰り、  
水の世話、卵集め、選別・洗卵機の運転などの日課をこなし、草取り鶏糞掻きと仕事にき  
りがなかった。若いからできた。無理をしているとわかっていてもこれぐらい平気だとい  
う気力があつた。夕方学校から帰った子供たちに、残りの卵集めと選別・洗卵を手伝わせ  
た。バツシーナ、若鶏の嘴を切る仕事は日曜日にすることにし、子供たちに教えた。食事  
の支度、部屋の掃除、洗濯といった家事は手を抜かなかつた。毎晩寝るのは午前一時半を  
まわつた。

## 第二章 楽しい団体旅行

三月も半ばになれば、そろそろ秋の涼風が恋しく思われる頃です。連日暑さが続いて、暑いのが大嫌いな私とはいえ、この暑さがあってこそ秋の良さが感じられるもののようにです。庭に種を落とした朝顔が毎朝すがすがしい花をつけ、おかげで朝ごとの目覚め楽しく、顔を洗っては、「おはよう！」と声をかけずにいられない。飾り気のないあつさりしたその花に、美しいとはこういうことなんだと一人合点している。はっと気が付いて、「いけない、バザーの出品のためのいろいろの品を八日までに用意しなければ」と動き出す。

夏も終わりに近いこの三月十日、私たちコチア農業婦人会はバザーを開きました。私たちははじめての団体旅行を計画していて、その資金をつくるためにバザーを開くのです。バザーには着るものから始まり、履物、飾り物、刃物、果実、野菜類、自家製のセツケーリヨ、食パン、かりんとう、コンポッタ、ドーセアバカンシー、漬物、せつけんなどなど。出品された物はすべて一人一人が忙しい毎日のあいまをぬって苦勞を重ねて作り上げた品ばかりです。この日は誰もの顔が「果たしてもくろみどおり売れるのか」という不安顔

でした。結果は大成功。みんなが一丸になって取り組んだ、その成果がみごとに実を結びました。いくつか反省点もありましたが、それは来年に生かしましょう。

資金ができて夢の団体旅行が実現しました。秋たけなわ、暑くもなし寒くもなし、灯影がしつとりと落ちて夜はまだいのが楽しくなる季節です。四月十日<sup>4</sup>（わたしたちはどうやら十日に縁があるようです）、午後三時、一人一人夕食のお弁当を大事にかかえて、コチア組合の前に集合。一週間の予定で、家事からいっさい解放され、生存競争の激しいこの世のことも全部忘れ、命の洗濯に出かけるのです。しかし、いざ七日間というどなたも皆、なかなか思い切れなかつたようです。ちょうど学校のプローバの週間にぶつかり、自分の役目をひとに頼み、子どもを置き去りにすること、炊事は、洗濯は、おじいちゃんやおばあちゃんのこととはと、とめどなく不安がよぎる。それを振り切つてバスに乗り込んだのです。うれしいようで淋しいような不安な気持ちで胸が締め付けられるようでした。はつと気が付くとバスの中は、みんなの話し声と笑い声がだんだん大きくなっていました。私もそれにつられて話の中に入っていくうちに不安は遠のいて楽しくなってきました。あたりは薄暗くなつて、バスはサンパウロ州を出ました。それから夜中を走り



「りんごに<sup>さわ</sup>触ること<sup>きんし</sup>禁止」とありましたが、<sup>さわ</sup>触らずには  
いられなかつた<sup>わたし</sup>私。

続け、あたりが白々と明るくなり、  
点在する家々、原始林の姿、山あり  
谷ありのめずらしい景色、サンパウ  
ロ州とまるで違う風景に子ども  
ようにはしゃいでいました。マリリ  
アからオウリンニオスまでの道路が  
非常に悪く、リンゴの目的地サン・  
ジョアキンに着いたのが、予定より  
1時間以上もおくれた八時すぎでし  
た。当地のコチア、ジェレンデ様は  
リンゴ選別室やカマラフリーヤなど  
を案内して、一生懸命お世話してく  
ださいました。大きな箱づめのリン  
ゴをみんな一箱ずつ買ってバスに乗

せました。つぎにリング畑に案内されました。大きな石だらけの土地なので、「草取りが大変ですね」と私が言うのと、「除草剤を使っています」と言われました。境界を示すために積み重ねた石垣が一直線に伸びていました。

その日はリオ・グランデ・ド・スールのベツカリアまで南下し、ホテル・セーハ・アウタに落ち着きました。この地域のきびしい寒さを知らない私たちにとつて、大げさに過ぎる暖房装置があつて、木材が燃やされていてロマンチックな香りがしました。ホテルの食堂でカラオケを歌つて楽しみました。

翌朝、グランデ???に向いました。名物のあじさいの花はすべて咲き終わつていて大へん残念でしたが、他の花が色あざやかに咲き誇つていました。見たことのない花、優美な花、かわいい花たち。ブラジルにもこんなすばらしい所があるんだ。老後はこんなところで楽しんで暮らしたいなあと一人感慨にふけりました。

ポルト・アレグレに着いた時は夜でした。教会のあたりを少し散歩して、大きなレストランテで夕食をとり、カンボリウへ上がりました。その後、二日間、アロジャメントで自炊をして、海水浴を楽しみました。海を知らない私たちが田舎者ですから、間断なく寄せ

ては返す波に身を任せるだけでした。クリスチーバに上がった時、はじめて小雨に会い、少し肌寒さを感じました。出発以来五日目の夜をここで過ごしました。よく朝、汽車に乗ってパラナグアへ向かいました。案内役が周りの風景を説明します。それを聞きながら窓から下をのぞけば、身も縮むほどの深い谷。するどく切り立った高山からまつすぐ底抜きの谷に崖が落ちています。

ようやくパラナグアへ着くと、そこにはもう観光バスが先回りして私たちを待っていてくれた。すぐにレストランで朝食。えび尽くしのごちそうだった。一週間、寝て食べばかりで、身が少し重くなったかというときに、朝食後ビラ・ベリーヤでいろいろな形をした岩を、首が痛くなるほど見て歩き、いい運動になりました。

夢にまで見ていた旅行が、もう最後の日になりました。ポインタ・グロッサで最後の夕食を名残惜しくいただき帰路のバスに乗りました。誰もかれもみんな疲れ果てていて、すぐに眠ってしまったらしく、バスの中はシンと静まりかえっていました。一七日早朝七時に帰着しました。みんな寝ほけてはいましたが、けがも病気もなく元気にバスから降りてきました。自宅に帰ると、テレビがニュースで二日前に観光したサンタ・カーリーナが

零下三度と報じていました。天気に恵まれてすばらしい団体旅行ができました。終わってみるとあつけないようですが、大きな望みがかなえられてホッとしています。

## 第三章

### にほん 日本での代筆

日本に滞在中、三重県上野市のY株式会社に勤めていた頃、ブラジル日系人、深堀ラウロさん一家と知り合いになりました。奥さんのシルバさんは全くのブラジル人。その家族が一時帰国を決意し、会社をやめることになりました。シルバさんは日本語がほとんど分からないが、何とかしてお世話になった会社の皆さんに感謝の気持ちを伝えたいと相談を受けました。そこで彼女の気持ちを代筆してお礼状を書きました。

### れい お礼のことば

日系人と結婚し、夫が自分の祖国日本に出稼ぎを決意したおかげで、私は日本に来ることができました。日本は素晴らしい国です。日本の何もかもが大好きになりました。来日してやがて一年になりますが、ブラジルにいる父母や小さな子どもたちが気になりますので、一時帰国します。また、きっと日本にやってくる予定です。

日本に来たところは、仕事のこと、風習のことなどに戸惑い、ブラジルに残してきた子

どもたちのことを思つて悲しくなりました。しかし、そのたびに会社の皆様がやさしくいたわつてくださり、元気を取り戻しました。仕事は楽しく、笑顔の絶えない明るい雰囲気です。作業の安全についても気をつかつて下さいました。一年間がアツという間に過ぎ去りました。私も夫も長男も、楽しい思い出をいっぱい作る事ができました。日本の国旗「日の丸」も大好きです。活きいきとした温かさを感じます。日本は私たちにとってたいせつな自慢の第二の故郷です。これもひとえに、会社の皆様のご親切のおかげです。いつまでもいつまでも、皆様と会社が輝いていますように願っています。

さようなら日本。

さようなら、皆様。

1992年3月10日

サンパウロ市 サン・ジョゼ・ド・リオ・プレット

深堀 ラウロ

シルバ

ファビオ

## 第四章

### 一行八人のブラジル訪問

日本に私が滞在中、娘時代から結婚するまでブラジルに十年あまり暮らした叔母檜山百合様が「ブラジルが恋しい、ブラジルが恋しい」としきりに言われるので、「じゃ、私がブラジルに帰国したらぜひ来てね」と約束して、往復切符を置き土産にして帰国しました。二〇〇三年に百合様の末息子の秋彦さんが、お姉さま二人と上のお姉さまの長男家族四人を誘って百合様を連れて、一行八人でブラジルに來られました。

百合様の父木村貫一郎(俳号圭石)は一九二六年に一家を上げて第一アリアンサ四区に入植しました。私の父木村三雄はその息子であり、百合様は父の妹にあたります。貫一郎は東京大学で工学を学んでいましたので、ブラジル政府にポンテ・ノーボ・オリエンテの架橋設計施工を依頼されたとき、引き受けてペレイラ・バレットに下宿します。百合様は単身移民の檜山晃様と結婚され、最初の女兒を一才で病死させてしまいましたが、長男救ささまが生まれてしばらくしたころ晃様の意思で日本に一時帰国されます。しかし、世界情勢が急を告げる中で再渡航ができず、一家はそのまま日本にとどまり、晃様のご両親

のおられる滋賀県に住まわれ、近江兄弟社に入社され、戦後を迎えられました。近江兄弟社の本部は近江八幡市にあり、そこで晁様のご一家は救さまの後に生まれた次女望様、三女協子様、四女光世様と次男秋彦様の七人家族でお住まいでした。晁様は一九五八年五月に癌で亡くなられました。望様はアルゼンチンに花卉栽培農家として移住された小沢さんと一九五九年に結婚されて、ブエノスアイレス市の郊外に住まわれました。百合様は望様の子育てを応援するために二、三回アルゼンチンに渡航されそのたびにサンパウロの宇都宮みどり様のお宅に立ち寄られました。みどり様は木村貫一郎・ふせ夫婦の末娘になります。百合様が一九七六年にサンパウロに立ち寄られたときは、私もガレオン空港に出迎えに行ったことを覚えていきます。

さて、二〇〇三年七月、アリアンサの私の家に到着された一行は、疲れも見せず、庭先を見て回り、私を質問攻めにしました。

「あーら、このゴツゴツとがった大きなものは何?」「それはブラジルの果物の王様でジャツカというの」「へーこれ果物!」「こっちは少し小さいけど丸くてゴツゴツ」「それはピンニャ。種だらけだけどおいしいよ。」「これは?」「それはアボガド」「えっ、ア

ボガドってこんなに大きくなるの!」「これは日本でも見かけるけど?」「日本ではスターフルーツというけどブラジルではカランボラというの、これは野生だから実が小さいけど、栽培しているのはこの五倍くらいの大ささよ」「あらっ、この赤くて小さな実はない?」「それはアセローラといってジューズにするの」「これは色が少し違うけどアセローラ?」「いいえ、葉が似てるけど果物の形が違うでしょ。それはピットタンガ。」「あら、また珍しい。地べたに実をつけてる。何?これ」「それはジャボチカーバ。樹の幹から枝先までびっしりと丸くてかわい実をつけるの。一か月ほどで黒光りに熟してくるんだけど今はまだ青いので食べられません。おいしいんですよ。」「こちらのジャボチカーバは花が満開ですよ」「へー!?雪が積もったみたいに白い綿が見事ね」みなさんカメラでぱち写真を撮りながらノートを出してメモしている。「わっ!?白い花にミツバチがいつぱい。怖いわ」「大丈夫。ミツバチも必死のかき入れ時、蜜を吸うのに夢中だから刺したりしないわよ」「あの樹は?」「あれも果樹だけど、果実をカジューといって実はやや脂っぽくて取り扱い注意のデリケートな樹なの。」

ちようど買っておいたものがあつたのでそれを見せると「種が外に飛び出している」と

珍しがる。「ここに目鼻口を描けばお猿さんそっくりでしょう」「あーらホントだ」「このカシューの種を炒ったものをカシューナッツとして日本のスーパーでも売ってるでしょ。私もよく買って食べたわよ」と言うと、「えー日本でも」とびっくりしていました。ブラジルでは、こうして土に刺しておけば成長して実がなる。イチゴでも水さえ切らさなければ勢いよく伸びて実をつけるし。「リンゴ、桃、梨はもつと南部に行かないとだめだけど、なかでもミカン類でペーラ、リーマ、ポンカン、タンジエリナ、ザボン、レモンガレゴ。他にパイナップル、ブドウ、枇杷、マラクジヤ、ザクロ、タマリンド、ゴヤバ、バナナ、マンガ、マモンなど二本つづくらい植えているわよ」と言うと「へー、ブラジルに住みたい」と言いました。百合おばさまが、マモンの木の下で何やら言っています。「入植当時は食べ物がない、なくて、いやーな臭いのするこのマモンの実をとって漬物にしたり、煮たりして空腹をしのいだのよ。」私は思わず涙があふれてきました。わたしの幼い頃でも同じような経験があるからです。しかし、マモンは実が青い内はありとあらゆる料理法があり、また、熟せばあまいフルーツとしておいしく、そのうえ便秘の薬にもなります。歯の立たないほどの固い牛肉でも、このマモンから出る白い液をほんの1・2滴加えるだけでとろけるように

柔らかくなるのです。青くてもじゆくしていても洋菓子のジャムにしておいしいし、幅広く大活躍のフルーツがマモンなのです。

翌日は、百合様が父母と一緒に、若き日に何年か住んだペレイラ・パレット(当時はノーボ・オリエンテⅡ北東Ⅱ植民地と呼ばれていた)に向かいました。私の兄木村雄幸夫婦も加わって総勢十五人。マイクロバスをレンタルして、運転手は私の弟の木村途有。途有は日本に十年余り出稼ぎして、その間に会社の指示で免許を取り、従業員を送り迎えるマイクロバスの運転手をしていました。日本からの皆さんは車中から見えるものが何もかも目新しく、「あれは何?これは何?」。途有はそのたびに車を止めてすぐ近くまで観察に連れていく。大木に張り付いている「クツピン」というシロアリの大きな巣。「ジョン・デ・バーボ」という鳥は嵐が吹きつける向きには巣の入り口を作らない。それを見て人は自分の家や小屋の位置や入り口の向きを決める。木の枝にごみを集めて長い巣を作る「グアツシヨ」という鳥。牧場のあちこちに赤土をこんもり積み上げたアリの巣。弟は懇切丁寧に説明する。やがて、チエテ川に架かる長い橋にさしかかった。車を降りて、川を眺める。はるかに広がる果てしない水面。「これが川だなんて信じられない」と口々

に感嘆かんとんの声こえ。「この水の底そこに、貫一郎おじいちゃんかんいちろうが架設かせつしたつり橋ばしがそのまま沈しずんでい  
るのよ」と説明せつめいする私の横よこで、百合おばちゃんなみだが涙なみだをぬぐっている。私も思おもわずこみ上げ  
てくるものを感じかんじた。この川かわをせき止とめたダムには大きな発電所はつでんしょができ、広い水域すいいきの港みなとか  
ら港みなとへ水運すいうんを利用して物質ぶつしが行ゆき交かう。

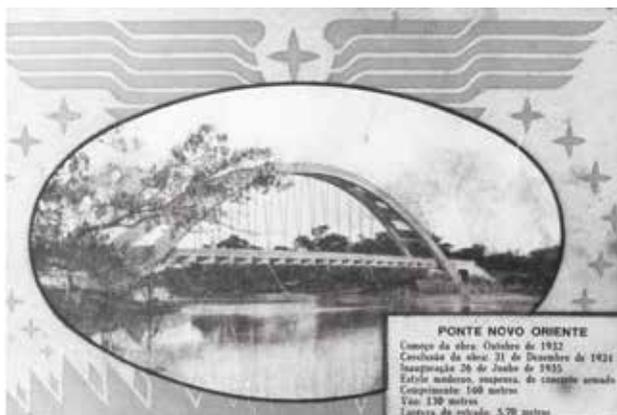
ポンテ・ノーボ・オリエンテほんてのーぼ・おりえんて（北東の橋ほくとうのばし）は日本人移民にほんじんいみんの木村貫一郎きむらかんいちろうが設計せつけい・監督かんてく・  
施工せこうした橋ばしとして、アーチ形あーちがたの美しい姿すがたとともに、日本人移民にほんじんいみんたちの自慢じまんと誇ほこりだった。  
工事費こうじひはブラジル政府せいふと日本の政府にほんせいふが分け合わつたと聞く。もちろん電気でんき・電話でんわ・重機じゅうきは  
ない。ロープ・コロ・滑車かつしや・梯子はしごを人間にんげんの力ちからだけで組くみ立たてて建設けんせつした。工事こうじの始はじまりは  
一九三二年十月1932ねん10がつ、完成かんせいは一九三四年十二月三十一日1934ねん12がつ31にち。完成式かんせいしきは一九三五年一月二十六日1935ねん1がつ26にちに盛大せいだい  
に挙きよ行こうされた。橋ばしの全長ぜんちやうは一六〇メートル160。幅はば五メートル七〇5.70。けが人や犠牲者ぎせいしやを出だしな  
がら、苦難くなんの末すえに橋ばしは完成かんせいした。この時ときおじいちゃんおじいちゃんはすでに六六才66さい、私の今いまの歳としだった  
のだ。この橋ばしができるまで、ポンテ・ノーボ植民地しょくみんちに行くには船ふねで渡わたる以外いがかいになかった。  
この橋ばしを渡わたるすべての人々ひとびとがカインイチロウキムラに感謝かんしやした。ノーボ・オリエンテは一いつ気  
に人ひとが増ふえ、みるみる発展はつてんし、一躍いちやく観光都市かんこうとしになった。ペレイラ・バレットおおがねもという大金持おおがねも

ちが市長しちやうになつて市名しめいをペレイラ・バレットに変かえてしまつた。

チエテ川ちえての下流かりゆうにダムを造りその落差らくさで発電所はつでんしょを作ることになつたのは、ノーボ・オリエンテ橋はしができて五〇年ごねんあま余り経たつた頃ころだつた。科学技術かがくぎじゆつの進歩しんぽで、おじいちゃんの橋の橋の十倍以上じゅうばいじゆうに長い橋ながが建設けんせつされるようになっていた。

ノーボ・オリエンテ橋の橋がダムに沈没ちんぼつして十年じゅうねんが経たつたころ、あるブラジル人がサンパウロのセスピせすびを訪ね、潜水夫せんすいふを雇やとつて写真しゃしんを撮とらせたという話はなしを聞いて、私は、雄幸と途有とすを誘さそつて、このブラジル人に会あいに行いつたことがある。その人はサルゲント・ヌネス(Sargento Nunes)さんと言いつた。彼かれは「Muito obrigado eu me sinto muito honrado (よく訪ねてきてくれた。ありがとう)と何度なんども頭あたまを下さげてくれて、「自分がその氣きになつたのはいどうはじめさんと言いう人の話はなしを聞きいたからだ」と言いわれた。そこで私わたしたちはそのいどうさんにも会あつてお礼れいを言いつた。いどうさんは水中写真すいちゆうしゃしんをDVDにしてくれていて。それを見ると橋はすこし濁にごつた水みずの中で凜りんとしてしつかり立たつていた。まったく傷いたんでいる様よう子はなかつた。

今回こんかい、百合おばさん一行いっぺいをペレイラ・バレットに連つれていくにあつて、以前いぜんアリアン



ポンテ・ノーボ・オリエンテ橋

サにおられて、今ペレイラ・バレットにお住いの  
 高村いわおさんに案内役をお願いした。「ポンテ・  
 ノーボ・オリエンテ博物館」に案内してもらっ  
 た。二階建ての立派な博物館に貫一郎おじいちゃ  
 んはじめ、建設中の様子などの写真があり、きち  
 んと説明書きがされていた。橋は一九九〇年の三  
 月から沈み始め、半年以上かけて十月に姿を消し  
 たという。毎年行われるペツレイラ・バレットの  
 入植記念祭に歌われる「チエテ音頭」にはこのつ  
 り橋が歌いこまれている。また、この橋を詠んだ  
 俳句もたくさんあって、日本の俳諧でホトトギス  
 派の巨匠と言われた高浜虚子が高弟として遇した  
 木村圭石の面目躍如たるものがある。虚子が圭石  
 に贈った句「ブラジルに置きし大きな露の玉」がア

リアンサ植民地の中央公園に大きな石碑に刻まれて立っている。貫一郎おじいちゃんは、橋が完成後二年目に亡くなりました。享年七十二才でした。今、私の家の壁にはこの時買いた求めた、橋の完成時に作られたカルトンポスタウが額に入れて飾ってあります。

高村さんはその日の昼食会場に、百合おばさまのアリアンサ時代のお友達で、ペレイラ・バレット近くに住む人を集めてくれました。田中しずこ様、よころ様、など、百合おばさまは抱き合って再会を喜び合っていました。もちろん、これがこの世での最後の出会いであったことは言うまでもありません。



## 第五章

### 冥土のみやげ<sup>めいじど</sup>

二〇〇八年七月、九七才の百合おばさまと息子秋彦さんが、再びブラジルに來られた。秋彦さんは「母に冥土のみやげだ」と冗談まじりに言っていた。しかし、百合様はすこぶる元氣。背筋を伸ばしてしゃんしゃんと歩いておられる。二一日、アリアンサの私の家で歓迎パーティーを催しました。その時、私は大勢の招待客の前で次のような挨拶をしました。もちろん挨拶などしたことはありませんから、前の日から一生懸命原稿にしておいたものを読み上げたのです。

皆様こんにちは。お忙しい中、ようこそお越しいただきました。檜山百合様、遠い日本からはるばるお越しいただきました。皆様と一緒に歓迎の拍手



我が家での歓迎パーティーであいさつする私。右は秋彦さん

を送りましょう。ありがとうございます。私たちは、お互い生きていくからこそ、また出会うことができる。そのことがうれしくてありがたくて。その喜びを分かち合いたいと思つて、このようなパーティーを企画しました。百合様をご存じない方も多くおられますが、百合様がアリアンサに入植されたところの方々はみな亡くなつておられます。百合様には当時のアリアンサのことを思う存分語つていただきたいと思ひます。その前に、今日お招きした皆様方おたがいに知り合ひでない方々です、ご紹介させていただきます。百合様の末息子、檜山秋彦さん。学校の先生でしたが、今は日本の滋賀県で市会議員をしておられます。次に、百合様の妹でサンパウロにお住いの宇都宮みどり様。私の叔母になります。次に、第一アリアンサ十区の新津様。ヴォランティアとして日本からお越しただいてゐるジヤイカの大野様。全アリアンサ文化会会長の本間様。第一アリアンサ文化会会長の山崎様。同じく副会長の蓮池様。全アリアンサ審査委員長の西富様。第一アリアンサカラオケ会会長で組合長でもあります東海林様。フォルモーズカラオケ会会長神村様。同じくフォルモーズ審査員の小林様。他の皆様には失礼ですが、ご紹介はこれくらいにさせていただきます。百合様のことにいらさせていただきます。

百合様は一九二六年、今から八二年前十六才の時に家族とともにアリアンサに入植され、六年後に父、つまり私にとつてはおじいちゃんかポンテ・ノーボ・オリエンテの架橋のためチエテ移住地に移り住みました。百合様はその後ブラジルで、單身移民の檜山様と結婚され、長男をもうけられてから、日本に帰国されました。百合様にとつてブラジルは恋しくて恋しくてたまらない第二の故郷、この度で五回目の訪問です。

ポンテ・ノーボ・オリエンテを設計・施工・監督した木村貫一郎には、妻ふせとの間に男四人女四人の子供があり、三男みつおが私の父です。百合様は、父のすぐ下に生まれた長女で、次に森花様、斎藤稲様、そして宇都宮緑様がおられます。みんなアリアンサで育ちましたが、お兄弟は全員亡くなり、女兄弟も今ここにいる百合様と緑様だけになりました。一世の方々がほとんど他界され、アリアンサも寂れる一方、そのうえ何もかもがほとんどブラジル化して、昔を知るものは淋しくなるばかりです。私たち二世はまだ古いほうで、子どもたち三世になりますと、こちらが日本語で話しかけても返事はポルトゲースばかり。孫たち四世になると「O que Baa tian está falando?」(ばあちゃんなに言ってるの?)と聞くありさま。四世の後は「ノンセイ」(知りません)ということになります。ブラジ



九七才、百合様。長寿お祝い。手作りケーキをかこむ私たち…

ルに暮らしているんだから、仕方ないと言えはそれ  
 までですが、私はいつまでも日本の仕来たりを大切に、  
 いつまでも日本人らしい日本人でありたいと思  
 います。植物も動物も人間様も生きていけば齢を重  
 ねるのが当然ですが、老いたものは老いたものどう  
 し長生きを祝って喜びあいたいと思ってお招きしま  
 した。皆様ほとんど還暦を過ぎておられると思いま  
 す。人間六十をすぎると、古自動車のようにあちこち  
 故障し、腕があがらないの、頭が下がらないの、腰が  
 いたいの、肩がこるの、足が痛くて歩けないのとなっ  
 て、何のかんのと医者にかからずにはおれません。  
 自分はあると何年生きられるだろう？寝込んだらどう  
 しよう、誰が看てくれるかしら？他人様に迷惑をか  
 けてまで生きたくない、などなど先のことの心配は

かりです。しかし、今日は九七才の百合様、九三才の新津様にあやかっつて、「まだまだこの先三十年はある」と楽しく飲んで食べて下さい。

全国的に高齢化社会です。若者や子どもが少なくなりしました。今年はブラジル移民百年記念の年ということもあります。お許しいただいて、若い人に言い残すことをお話しさせていただきます。

父母はいつも私に「アキは日本がアジア(亜細亜)で戦争を起こしたときに生まれたので『亜起』と名付けたと言っていました。私の生まれる三五年前くらいから、日本人のブラジル移民がぞくぞくと来るようになりました。そして、現在は逆にブラジルから日本へどんどん出かけるようになりました。私もその中の一人として十一年間出稼ぎしました。きびしい寒さの冬、慣れない慣習を乗り越えるのに苦労しましたが、現代の私たちの苦労に比べたら、百年前にブラジルの密林にやってきた日本人移民の苦労は十倍も百倍も大きかったと思います。まず、ポルトガル語が全く分からない。お店に行つてこれは何かと指をさして聞いたら、いきなり「バカヤロー」とどやされた。ほうほうのていで逃げ帰つて、聞いたら「バカリヤウ」という食品のことだった。セメントが足りなくなつて、隣のファ

ゼンダに行つて、後で返すから貸してくれという意味で「セメントを貸してくれんか」と言つたら現地人が「セメント・デ・ガリンニヤ（種付け用の雄鶏）」を差し出した。本当にあつたことだと親たちに聞きました。身体一つを資本に、斧一本で原始林を開き、猛獣のオンサやアンタ、タマンツアが夜ごとに遠く近く吠え交わすのに怯え、赤ん坊の病気にも医者はなし薬はなし。身も心も削る原始生活。その中で私たちを育ててくれた父母、おじいちゃん・おばあちゃん。ありがとう。感謝して恩返しをしなければなりません。しかし、時代の移り変わりは激しく、今の人間社会はそうかんたんではありません。子どもや孫たちはみんな都会の学校に出ていき、卒業したら職のない田舎に戻れることはありません。日本でもこんなことがありました。私が出稼ぎ中に、三重県のある市民病院でお年寄りの介護の仕事をしていた時、ある患者さんが「日本もな、今の若いもんは年寄りをうるさがつてな、わしはもう早く死にたいよ」と言われるのです。何年か介護してあげた末にその方が亡くなりました。引き取りに來られたご家族が「アキさん、本当にご苦労をおかけしました。アキさんがいなければ、私たちは仕事を止めて介護にあたるつもりでした。まるで家族のようにおじいちゃんを介護してくださつて本当に助かりました」と言われま

した。一方、私の気持ちは身内の家族に最後を見送って  
もらえなかった本人の気持ちを知っているだけに気の  
毒でなりませんでした。日本もブラジルも時代の移り変  
わりとともに家族や人間の関係は変わります。これは  
世界中どこでも起きている問題ではないでしょうか。日  
本では、戦後の焼け野原を必死で生き抜いて子育てした  
方々、ブラジルでは荒地を開拓してわずかな食料を分け  
合って必死に生き延びた方々、地球の裏と表の違いです  
が、そこには同じ苦労があったのです。戦後生まれの私  
の弟に、父は「途有」と名付けました。祖国の敗戦の向こ  
うに前途が洋々と開ける思いがしたにちがひありません  
。私が初めて、出稼ぎで日本を訪ねた時、これが戦争  
に敗れた国なのかとびっくりするほど美しく輝いて見  
えました。ブラジルでも日本でも、日本人は素晴らしい



親族代表であいさつをする秋彦さん。

ちからを發揮している。私は日本人にうまれてよかった。日本人として、このブラジルで生まれ育てられたのもよかった。私の愛するふるさと、親たちが切り開いたアリアンサ、私はここで死ぬ。ここを死に所と決めていきます。

百合様がブラジルに来る前から、ぜひお会いしたいと言われていた新津様がここにおられます。すこぶるお元気な九三才。今なおいたるところにお出かけになり、アリアンサに尽くされています。野球の大ファンで野球が生き甲斐。一方、俳人としても大活躍。村松紅花先生の選句集と奥様との夫婦句集を発行されるなどしています。私もそのご本をいただいたので、字引を片手に一所懸命読んでいます。俳句はとてもむつかしくて、なかなか詠めませんが、五七五の十七文字にまとまる句の意味が少しわかりかけてきてとても楽しいのです。心を癒される感じがします。

少し前にジエンジアイのお友達ひぐちみきおさま(俳号を「玄海児」といわれます)が、いちばん気に入った句だといって、圭石おじいちゃんの句を七句選んで送ってくださいました。それをご紹介します。

一、一房ひとむさのバナナに老ろうは肩かたかえて

一房といえどあまりの重おもさに老夫ろうふは肩かたを替かえたのです。

二、兄弟きょうだい老おいてちりぢり春はるを行いく

春、家族の異動で老人も居所を変えます。

三、老おいの足あし負まけずに進すすむプランタ機たき

ちいさな種まき機がパチャコンパチャコンと進みます。

四、さえずりのボンジイヤとこそ聞きこえけり

この句くが詠よまれたころはあたりの原始林げんしりんから朝あさの小鳥こどりのさえずりがやかましいほどでした。ボンジイヤ（こんにちは）と口々くちぐちに鳴なき交かわして私わたしたちを目覚めざせましたのです。

五、夜を守る犬に残せし焚き火かな。

大木を倒して焚き火をします。犬たちは焚き火の周りで、猛獣の接近を警戒してくれました。

六、草取りの怠見ゆる珈琲ばた

コーヒー園の日々の労働に対するいたわりが感じられます。

七、ふり返りマットに消えし道の鹿

なつかしい句です。以前は鹿がよく道に出てきました。人の気配に気づくと、振り返って見た次の一瞬にマットに飛び込んで見えなくなりました。

以上、圭石おじいちゃんの俳句を紹介しました。今日は百合様の歓迎パーティー並びに移民百年記念と私たち老人、別けても百合様・新津様の長寿のお祝い、さらにいつそ長生きされることを願って、お粗末ながら手作りのケーキをご用意しました。これから

切ってお配りしますので、お召し上がりながら、「いつか誰もが通る道」という私の文章を読みますのでお聞きください。

結婚して間もなくの三十代の頃、自分が五十、六十になるなんて想像できず、お姑さんを見ていた。なんであんなに早起きなんだろう。なんであんなに動作が緩慢なんだろう。いちいち目障りにさえ思えた。ふと、気が付いてみると今の自分がそっくりそのまま。若い人にうっとおしく思われるまで口を出し、そのくせ頼まれたことをすつかり忘れていく。「母さん耄碌したな、体がいうこときかないくせに、口だけは達者だな」と息子に嫌味を言われる。いつの間にか、自分がそうなっていた。けれども、さらに十年二十年たてば、耳はとおくなり、しわくちやの腰折ればあさん。杖にすがってびっこを引きながら、息子に向かつて「あんただくれ？」なんてことになる。いやだと言っても遅かれ早かれ生きていく限りそういうときがくる。そう気が付けば、いたわりの心がわいてくる。誰もがいつかは通る道、自分も必ず通る道だと気がついた時、家庭はまるく収まり、社会は明るくなるのではないかと思うのです。

つい最近、あるお医者さんに「歳を取らないようにするにはどうしたらいいんでしょう

ね」と冗談じょうだんのつもりで言いったら「若い内うちに死しねばいいんだよ」。まったくその通りとお。でも誰だれだって早死はやじにしたくはないですよ。長生ながいきしたいですよ。ですから長生ながいきされているお年寄としよりを大事だいじにしましょうね。

百合はな様に、アリアンサ滞たいざい在中ちゆうに見てほしいものがあります。ペレイラ・バレットばれっとの博物館はくぶかんにポンテ・ノーボのーぼ・オリエンテおりえんてのブラツカぶらつかが展示てんじされているそうです。橋脚きょうきゃくにはめ込まれていました。博物館はくぶかんの資料しりょうを集あつめておられる増田ますだ様がフエーボふえーぼ・ペーリヨペーリよで手てに入いれたそうです。百合はな様一行いっこうは二六にじゅうろく日からトカンチンス地方とかんちんすちほうへ一週間の旅たびをされ、その後ごミナス方面すほうめんに行いかれます。

では、皆様みなさま、ご馳走ちそうを召めし上がりながら楽たのしくご歓談かんだんください。しばらくしたらマイクまいくを回まわしますのでひとことずつお話しはなしてください。よろしくお願ねがいします。



お別れの日。サンパウロ グワルリョス クンピカ空港くうこうにて。

あきひこふき  
秋彦付記

百合と私はその後も旅を続け、八月八日午後サンパウロを立て、ドバイ経由で九日一七時二十分に関西空港に帰着した。その後も、母は元気にしていたが十二月八日、体調を崩し、ベッドに横たわる時間が長くなった。「もう、長くないよ」と、息子に言い聞かせるようにつぶやいたのがこの頃であった。十二月二三日早朝、トイレで小用をたした後動けなくなつて、私を呼んだ。抱き上げてベッドに戻り、そのまま私の膝の上で、私に抱かれていた。「背中をさすつて」というので丸くなって骨の浮き出た背をさすり始めたとき、フーと大きな息を一つついて、そのまま、旅立ってしまった。(二〇二〇年二月八日記)



## 第六章

### わが家の娘

年の暮れ、十五日間電話が故障した。兄弟、子どもたち、みんなに連絡がとれない。困ってしまった。故障したその日にテレスピに連絡した。「四八時間以内に伺います」。「え、四八時間もかかるの」と気の長い返事につくり。ところが、四八時間どころか三日たっても四日たつても直しにこない。たまりかねて、公衆電話からテレスピに再度電話を入れると「四八時間以内に行きます」。ところが、待てど暮らせど来ない。家の中で配線がどうかなったのか、調べて回ったがそうでもなさそうだ。一人暮らしの私を心配して娘が飛んできてくれた。「なんですぐに直さないのよ」と怒っている。「母さんの電話は、もう『出ん話』になっちゃたんよ」と冗談でごまかす。「昔は電話なんて便利なものなかったんだ。おじいちゃんおばあちゃんの苦労が少しは分かっている」と言うと、何事にも感情の抑えきれぬ性格の娘は、鬼のような顔で、「母さん、百合おばさんが亡くなったんだよ、それを知らせようと思っただのに、のんきなこと言って」「のんき？のんきなのは私じゃないよ、ブラジル人ののんきさにはこちらがへこたれるよ。それに百合おばちゃんの

ことは、家の前の公衆電話でタケオ君に電話が壊れたと相談したときに聞いたわ」「母さんみたいに優しい声でたのんだっていつまでたつても直しに来るもんですか、私がテレスピにどなりこんでやる」と勢いよく出て行った。娘は父親にそっくりだとあらためて感心する。娘の怒鳴り込みで、テレスピがやってきた。それも今日はクリスマスという十二月二五日。今さらながら娘の鼻息の荒さに感服。この勢いで家事をこなし仕事をこなし近所づきあいを乗り切っている。

それはそうとして、百合様が亡くなられ、私の胸にぽっかり穴が開いた。「兄弟老いてちりぢり春をゆく」おじいちゃん木村圭石の俳句そのままに、私の父の兄弟たちもサンパウロの叔母みどり様ただ一人になった。ほんの半年前七月二二日に息子の秋彦さんが「冥土の土産の旅だ」と言ってブラジルに来られたばかり。アリアンサの私の家で歓迎パーティーを催してにぎやかに楽しんだ、その夜が明けるころ、百合様のうめき声で目を覚ました。聞けばドバイからの飛行機がエアポケットにつっこみ、ちようどそのときトイレに入っていたおばさまは激しく頭を打ったという。近くに住む救急車の運転手をたたき起こし、あえぐように息をする百合様を担架で運び、秋彦さんとミランドポリス

の病院に向かった。点滴、注射で危機を脱したものの、退院できるようになったのは一週間後であった。この一週間に予定していた私の計画はすべてキャンセルになったが、そんなことより、あの時（とき）のことが百合様の寿命を縮めたのではないかと悔やまれる。あのパーティーがお別れパーティーになってしまった。享年（きやうねん）九七才と六カ月だった。

百合様は大あざみの花が大好きで、いつも枕元にはあざみの写真がかざってあったそうだ。その写真の裏には百合様が辞世の句を書いておかれたという。

大あざみ 南の国を 夢に見る

よほどブラジルが恋しかったのでしよう。ブラジル



百合様最後のブラジル訪問。我が家で血圧を計ってあげている私。

で一生暮らしたかったと出会う度に思い出話を交えて話してくれた。私が日本滞在中「今度の休みの日に伺いますが、何か欲しいものがある？」と聞くと、「ブラジルのベルミット、カフエ、フェイジョン、リングイツサ、ベカリヤウ」と言われるので、ブラジル食品を扱う店で買いそろえて持つていきました。すると百合様はあのお歳で台所に立って、私にブラジル料理をごちそうしてくれました。「ブラジルに移住する船がサントスについて、船を降りて最初にいただいたご飯がこれだったの」と言いながら、平べったいおさらにご飯を盛ってその上からフェイジョンスープをたっぷりかけ、端には一切れのリングイツサを置いた料理を差し出す。さすが十年ブラジルに暮らしただけあるお料理でした。

救急入院した時も、回復してくると、思い出すブラジル語をちよこちよこまぜて、看護婦さんに話しかける。看護婦さんたちも喜んで「Batanzinha」（かわいいおばあちゃん）とあれこれ世話をやいてくれました。百合様が退院するとき、私は百合の花の鉢植えを看護婦さんの詰め所に持つていきました。「この花の名前は Batanzinha の名前とおなじユリなの」というとみんな喜んでくれました。その後私が病院に行くと「Batanzinha はぶらこてる」と聞いてくれるのです。小さくて、かわいくて、いつもシャ

ンとしてはきはきは話す百合様は看護婦の皆さんに強い印象を与えたようでした。私をはじめ、いつも周りのひとびとに、生きる喜びとありがたさを感じさせてくれた百合様も、ついに帰らぬ人となった。その立派な晩年を見習って私も生きたい。九七歳まではまだまだ大変な道のりがあるかもしれない。長いようで短い、大切な人生。親からもらった大事な身体。弱音を吐かず、無駄にしないように生きたいと思う。(二〇〇九年一月)



## 第七章

2009年

母の日

母の日、おめでとうございます。

毎日、どんなことがあっても、子どものことを心配し、子どものためになんばるのがお

母さんですが、そのことを決して忘れず、毎年「母の日」にこのような素晴らしいお食事の会をプレゼントしてください。青年団の皆様にも頭が下がります。やさしいお心づかい、ほんとうにありがとうございます。カラオケを歌うことが、恒例の行事ですが、私は母の日にちなんで、「岸壁の母」を歌わせていただきます。

ところで、この歌を歌っておられる二葉百合子さんは、この歌の主人公の女性を自宅に訪ねていかれたそうであります。女性は、軍人姿の息子の写真を前に、「戦争に行ったまま、何の音沙汰もない息子だが、必ず生きています。いつかは必ず帰ってくる。それを信じて命ある限り、あきらめはしません。舞鶴の港に立ち続けます」と話されたそうです。これが母親というものですよね。その後、何年経っても息子は帰って来ず、とうとうお母さんは亡くなられたそうです。私がそろそろブラジルに帰ろうか考え始めたその年に、あ

る日のラジオオニユースで、その息子さんの消息が分かったと報道されました。シベリア人と結婚して所帯を持ち、元気に暮らしていたそうです。私はニュースを聞いて思いました。元気でいるなら、どうして連絡しなかったんだろう。なんで一言「おかあさん」と呼びかけなかつたんだろう。私は「岸壁の母」のお母さんが気の毒でなりません。放送の中で、歌手の二葉百合子さんはインタビュに答えて「息子さんの消息が分かつてうれいのはうれいんですが、歌手としてはこの歌が大変歌いにくくなりました」と話していました。

私は一九四二年生まれ、「アジア（亜細亜）に戦争が起こる」という意味で「亜起」と名付けられました。ですからこの歌がとても意味深く感じられて好きなのです。それにしても、戦争は誰だっついていやですよ。二度とあのような戦争があつてはならないという思いを込めて歌わせていただきます「岸壁の母」。

## 第八章

### 孫の成人祝い (1)

孫たちの誕生日を祝ってやったことがないので、今年初孫のホドリゴが二十才になるのを機会に成人を祝ってやることにした。日本では満二十才が成人なのだが、ブラジルは成人の祝いなど特別何もないし、十八才が一応大人として認められる年齢とされているので、孫たち七人の内年上の三人をまとめて成人として祝ってやることにした。

ホドリゴが生まれるとき、息子が「Mamaé vai Ficar Batian (母さん、おばあちゃんになるんだよ)」と言って、だから出産に立ち会ってくれというので、用意はしていたが、いざその連絡が入ると私も慌てて、朝のコーヒーを入れるつもりで火にかけていた鍋が着替えている間に空になって火の上で踊りまくっていたことを思い出す。病院に駆けつけて間もなく、「生まれた！ Mamaé Macho 男の子が生まれた！」と息子が、ちょうど朝のコーヒー鍋のように、廊下を踊り回って喜んだ。息子の大騒ぎに看護婦さんたちが大勢廊下に出てきて「こんなに喜んで、すつ飛んで走り回るパパイ(父親)は初めてだ。ばあちゃんは幸せだね」と言ってくれた。

これが長男の長男で、次に生まれた孫は、私の長女の子ホベルトである。この子も Macho (男の子) だった。今年十九才になる。この子が生まれるときも娘が来てくれというのでアラサツバの病院まで行った。その日はアンドラジーナでエリーザのシヨウが開催される日で、私はその入場券を買っていたので、気が気ではない。「おい、早く生まれろ、外の世界は素晴らしいぞ」と娘のおなかに呼びかけてやったが、どっこいのんきな子で夕暮れになってやっと生まれた。今でものんきな性格だ。

三番目のハッフアエールは長男の次男で「ハッフア」と呼ばれて人気者だ。この子は私が日本に出稼ぎに行くためアリアンサを離れる前の日に生まれた。私が日本に出かけている間に、この後、四人の孫が生まれた。娘の家族はアリアンサからバスで北に二六時間かかる「常夏の国」トカンチンスというところに住んでいる。

私が、生まれるのを見た孫ははじめの三人だけで、日本から帰った時にはこの子たちはもちろん、あとから四人生まれていた孫たちももう大人の体に成長していて、私が子供のように小さく感じられた。孫たちのかわいい成長期を見逃してしまったのが残念でならない。幼い時に抱きしめられた感触とぬくもりをこの子たちには印象付けられなかったの

だ。初めて見るおばあちゃんをなんと呼んでくれるのだろうか。なついてくれるだろうか。はたしてかれらは私を「チーア（小母さん）、チーア」と呼んだ。ママイは、根気よく「チーアじゃないよ、ばあちゃんだよ」と訂正するが、なかなか治らない。「チー」と言いかけて「あつ、ノン、ばあちゃん」と首をすくめて言い直すしぐさがまたかわいい。

家族と離れ離れに過ごした十一年半、父母の祖国とはいえ、一人で淋しい思いをしてきたが、こうして帰ってくる二人の子どもの家庭が立派に成長し、孫たちが元気に育っている。その姿にびっくりすると同時に自分が年を取ったことを残酷に思い知らされている。これからも、それぞれが自分の健康をしっかりと管理し、危険と誘惑だらけの社会の中で自分の基礎を固めてくれたら、これに勝る幸せはない。今年の上三人の成人を祝ってやったが、あとの四人はこれから先何年かある。ばあちゃんはまだまだ頑張らなければならぬ。わが子の誕生日ですらまともに祝ってやれなかった昔だが、このさき、四人の孫たちの成人の日を手作りのケーキとサラリヨ一つ、ポウサパンサを一本開けて祝ってやりたいと楽しみにしている。

(2009年6月21日)



## 第九章

### ♪人生半分

一、家族も知つてのとおり いつもガムシヤラだった

雨の日も風の日も ろくに休まず眠らずに

子どもの笑顔を 励みにしながら

生きるために尽くしてきたのは 言うまでもない

図らずも歳の割には 出世も早く

将来を約束されたかに思えたけれど

描いた夢には見向きもせず ひたむきに

生きて来たと思う

人生半分 まだまだ半分

人生半分 五十で始まる夢がある



ランの花をバックにごぎげんな私。

二、いつしかどこかに 置き忘れてきた

家族の絆と 自分らしさを

大事なもののさえ 振り返らずに

いったい何を求めてきたというのか

どこまでも青く広がる 故郷の空を

見上げてはふと思う 歩き続けた年月

この先まだまだ続く人生 今やつと

見えてきた気がする

人生半分 これから半分

人生半分 五十で始める夢もある

ほかでもないが よく聞いておくれ

思えばみんなに心配かけた

できるならば これから先は



笑顔をお忘れず 生きて行きたい

人生半分 これからでいい

人生半分 元気で暮らせりやそれでいい

アリアンサで暮らせる それだけで

「人生半分五十で始める夢がある」。この歌は日本で出稼ぎをしていた私が、ブラジルに帰ると決めた前の年に大ヒットした。家族を置き去りに、辛い孤独な暮らしを地球の裏側で送っていた私は、「月いつしかどこかに置き忘れてきた、家族の絆と自分らしさを、大事なものをさえ振り返らずに、いったい何を求めてきたというのか月」、この歌詞で胸がいつぱいになった。そのころ私は還暦を迎えようとしていた。故郷を離れ、十一年半、郷愁のあまり鬱ぎみになっていた。しかし、ある事情があつて、帰郷するわけにいかず、「神様が守っていてくれるから、その時が来れば必ず解決して帰郷できる」そう信じて出稼ぎ生活を続けてきた。しかし、日に日に気持ちのおさまりが付かなくなり、辛抱しき

れずにサンパウロの兄たちに電話をし、事情を打ち明けた。兄たちは一様に「なんで早く打ち明けてくれなかったのだ。何とかするから一刻も早く帰りなさい」と叱るように言うてくれた。それでも私は、「兄たちには兄たちの家族と生活があり、居候するわけにいかないし」などと迷いながら、また半年ひきずった。しかし、いよいよ我慢ならなくなり、サンパウロの長兄の所に身を寄せる決心をし、大きな段ボール箱五つに荷を詰めて発送した。翌日、出社して退職を告げるために起きようとするのだが、どうにも身体がだるくて重たく、難儀の末に身支度をしてやつとの思いで送迎バスに乗り込んだ。ところが、会社に着くといきなり上司の社員が「アキちゃん、今日一日、違う現場で頑張ってくれませんか」と言う。「実は、今日私……」と口に出かかったが、前にしたことのある慣れた現場だったので、「はい」と引き受けてしまった。体調が悪いことを上司には言わないでおこうと決めて、やつとこのことで仕事についていると、十一時ころ別の社員さんが「僕、交代しますので昼食に行つて下さい」と言うてくれた。食堂に上がると、いつもよく声をかけてくれる課長さんが「アキちゃん、えらい顔色が悪いな。どうしたんだ」「えらいんか？ 少々々えらくても食べないと身体がもたないよ」と言うてくれた。胃がむかついてとても食べる

気がしなかったが、無理をして少しだけ飲み込むように押し込んだ。やはり、二時間後にむねをつけて込み上げてきたものを吐き出してしまった。石のかたまりのようになっていた。トイレに走る間もない出来事だったので、仲間のリーダーに見つかり、その通報で社員さんが飛んできて、処理を手伝ってくれた。そのまま、定時まで働き、さらにいつものように三時間の残業。いつもはさらに三時間追加残業するのだが、この日はやはり身体がもたず、帰ることにして、ふらふらと更衣室に向かった。その時、社内放送が響いた。「アキさん外国からお電話が入っております」。「会社に電話？ どうせいいことではあるまい」と直感した。娘からだった。電話の向こうで泣いてばかりで話にならない。送迎バスに乗り遅れるので、「帰ってから電話するから」と言って、バスに乗った。アパートについてすぐに電話した。「パパイが事故で亡くなった」という知らせだった。「虫の知らせ」というのがあるのだろうか。朝あまりに気分が悪く、起きようとして起きられなかったちようどその時間に、主人は車の運転事故で死んでいたのだ。サンパウロの兄の所に帰る決心をして、あらいざらい荷物を送った後、会社を辞める最後の日と決めたその日、神様は私をブラジルに強制送還する手続きをしたのだ。私は神様に見守られている。そう実感した。

「日本に出稼ぎに行く」と言ったとき、四十代で続けさまに四回も大手術をした体で無理をするなど大反対された。しかし、私の決意は固く、なんといわれてもひるむことなく、日本に来了。そして、十一年半、かえつて病氣もせずに頑張ることができた。しかし、今日、会社最後の日に、初めて医務室で体温を測ったら四十度近くもあつた。

私は受話器をおいて、そのまま眠つてしまった。何時間経つたか、何日眠つたのか。同ジアパートに同居するかい(甲斐)テレザさんが、熱にうなされる私を看にきてくれた。た。「食べないと弱るよ」といつていろいろもつてきてくれた。この時ほど、友達のありがたさ大切さを身にしみて感じたことはない。

主人が死んだとて、直ちに飛んで帰るどころでなかつた私だが、どの旅行会社に電話しても、ブラジル行きはすべて満席で、やっと月末二八日に一席だけあるという。それを待つ外なかつた。ついに、ブラジルに帰る日が来た。ほんとうに帰れるのだろうか。まだその時でも、半信半疑だつた。日本にいた十一年半という年月がまるで意味のない時間であつたようにさえ感じられた。

月日のたつのが矢のように早い。ブラジルに帰国して、もう六年が経過した。帰国した

ときちようど六十才60さいだった。帰国きこくと同時に還暦かんれきご後の人生じんせいがはじまったのだ。この年まで何をしてきたのだろう。無我夢中むがむちゆう、がむしやらに突つ走ばしってきた。人並ひとなみに、いや、人並ひとなみ以上に苦勞くろうしてきたのは間違まちがいないように思おもう。

先日せんじつ、バリンニョスの叔母おばが「アキちゃんも還暦かんれきす過ぎたんだよね」というので「かんれき過ぎてかれきだよ」というと「それじゃ、私は腐れ木くさきかい」という。「チーヤ、八三年83ねんも無事ぶじに生いかしてもらって、自分じぶんを粗末そまつに言いつちやあだめよ。枯れ木かきに花はなが咲さくというこ  
とわざもあるでしょう。枯れ木かきだつて腐れ木くさきだつて山の賑にぎわいだよ。元氣げんきを出だして楽たのしくいきましよう」とばあさん同士どうしでなくさめあつた。

そういう私も、氣きは若いわかが齡としは隠かくせない。顔かおがやつれ、姿勢しせいもよくない。でも、夫おつとの死し以來いらい、大きな悩なやみから解放かいほうされて、誰だれに遠慮えんりよ・氣兼きがねすることもない氣きままな暮くらしを送おくっている。四人にんの子こらはそれぞれに社会しゃかい人じんとなり、所帯しよたいを持つもつて一本立いっぽんたちしている。「二人ひとりでいてもらつちや心配しんぱいでならないから、一緒いっしょに住すもうよ」と口々くちぐちに言いつてはくれるが、住すみ慣なれた田舎いなかは天国てんごく。まして、たった一つの趣味しゆみのカラオケ仲間かおけなかまと離はなれることは生いき甲斐がをなくすほどつらい。今いまさら周まわりに氣きをつかないながらの都会とかいぐ暮くらしができるはずも

ない。とは言えあと三歩で七十路となれば、何が身に起きてても文句は言えない。

思い返せば、いろいろあった私の人生。

♪人生半分、ひたむきに生きてきた

人生半分、今やつと先が見えてきた

人生半分、これからでいい

元気で暮らせりやそれでいい

アリアンサで暮らせるそれだけでいい

(二〇〇九年十一月)



サンパウロ アルジャヘ  
弟とお花見。

## 第十章 S先生のお別れパーティー

S・W先生のお別れパーティーにあたり、一言ご挨拶させていただいて、送別の唄を歌います。

任期の二年間があつという間に過ぎてしまいました。先生の心はもう故郷日本に向かつていると思いますが、私たちは大変お名残り惜しく思っています。学校の休みの日には、私たちだつて知らないところを多く見物されたそうで、よかったですね。先生はまだお若いですから、またお越しただいて、ブラジルの大地をくまなく見て回ってくださいね。

二年前、初めてアリアンサに来られた時、アリアンサの印象をお聞きしたら、「こんな田舎だとは思ひもしなかった」と言っておられましたね。私たちカラオケ仲間にとつて、カラオケのお上手なS先生が赴任されたことはとても刺激になりました。今夜は海外派遣教員生活の一区切りの歌いおさめに、お好きな歌を好きなだけ歌つて私たちに聞かせてくださいね。まだまだ、これからのお若いS先生、ますますご活躍下さい。私たちは残りの人生がそう長くはありませんが、精いっぱい大切に生きていきたいと思ひます。ブラジ

ルの片田舎、アリアンサに私たちのようなものが生きていることを折に触れて思い出して  
いただければ嬉しく思います。

ブラジルは一昨日冬に入りました。日本は猛暑に向かっています。帰国して体調を崩  
さないように、夏バテしないように、体調管理に気を付けて下さいね。日本は北部が寒い  
気候ですが、ブラジルは南部で雪が降ります。日本は北部でリンゴがなりますが、ブラジ  
ルのリンゴ産地は南部です。一日の時間でも日本とブラジルは真逆さま。今、夜の九時  
は日本の朝の九時ですものね。ただいま、南部地方では大雪が降っているとニュースで  
言っていました。今夜、私は先生にお別れの唄として大好きな大雪の唄を送ります。それ  
ではお聞きください「氷雪の海」。

## 第十一章

2011年

母の日

皆様、こんばんは。母の日おめでとうございます。青年団の皆様、今年もこの日の宴会の支度にご苦労いただいております。唄の前に一言自作の文章を口上させていただきます。いつも頭に浮かぶ気になることを書いてみました。「母の日と人間世界」と題しました。

「かあちゃん・かあさん・お母ちゃん・お母さん」日頃、いろいろ呼び交わされる「母」ですが、「母」の一生は、目に見えない大きな責任を背にしょって必死で頑張る一生なのではないでしょうか。まずは子供を産むという大仕事に始まり、炊事、掃除、洗濯、アイロンかけ、休む暇なく動き回ります。農家であればそのうえに畑仕事や養鶏といった男の仕事を補うことも当然です。当然でありながら、目立たず Valoriza (評価) してもらえないのが「母」の仕事です。ですからこそ、年に一度の今日、母の日の夕食会のひと時が最高に意味深く感じられるのです。人の一生には、いろいろな起伏がつきものです。若い夫婦にはお父さん・お母さんばかりか、おじいさん・おばあさんがおられる方もあるでしょう。

中には連れ合いの兄弟姉妹と一つ屋根で暮らしている方もあるかもしれません。「小姑さ  
 ん」です。複雑な家庭であっても、そこは一つ屋根の下、仲良く助け合って、お互いを大切  
 にしていききたいものですね。長く生きていくと、いつの間にか身内の一人二人と欠けてい  
 き、最後は一人ぼっちになってしまうのです。とても寂しい気持ちになります。そうして、  
 やがては、ベッドの上で動けず寝込んでしまい、人生の終幕を迎えるときが必ず来る。今、  
 そういう身内を抱えている人は、やがては自分にめぐってくる境遇を学びながら、大切に  
 看護してあげてくださいね。あなたが若い人たちは、この老人たちがいたからこそ今こ  
 の世にあるのです。頼りにしている間はいいが、頼りにならなくなったら老人ホームでも  
 どこでも行ってくれではなくら何でもかわいそうではありませんか。老人は、住み慣れた  
 環境では長生きできますが、いきなり老人ホームに行けとか言われても環境になじめず  
 命を縮めるばかりです。自分たちで苦労して築いた住み家を離れることはたとえわが子  
 のよびよせでも辛いことなのです。わかったような口をきいて申し訳ないですが、老人の  
 仲間入りした私が最近気になって仕方ないことなのです。日本から帰ったらアリアンサで  
 老人ホームでもやるかと思って、息子にマッサージスタの免許を取ってくれと言ったけど、

息子は全くその気がない。家の庭に Area de Lazer を作つて、なんて思い描いていたけど、それもかなわないうちに、アリアンサの年配の方々が次々に他界されてしまい気が付けば自分たちの番が来ていました。二世の私たちがいなくなれば、アリアンサに日本語を話す人がいなくなり、日本人らしい行事も絶えていくにちがいない。心細く寂しい限りです。

私は日本で終末期の老人を看護する仕事についてきました。とてもいい勉強になりました。ほとんどの患者さんが、戦時中から戦後の復興期にかけて、一心不乱に働き、飢えをしのぎながら、お国と家族の幸せだけを願って身を削ってきた人たちでした。その人たちが、いよいよ死を予感し、苦しみに耐えながらこの世への名残惜しさを口にされるのを聞きました。その末期の苦しみ、臨終のときを看取る務めは、あまりに辛く悲しいものだったので、六年半頑張りましたが、ついに耐え切れなくて身を引きました。いまだに、あの頃のことを思い出されて、胸を締め付ける苦しさに襲われることがあります。

人間が一生を楽しむ生きながらえるには、第一に家の中の人間関係でしよう。おじいさんおばあさんは、息子の嫁に対してつらく当たらず、自分の娘のようにやさしく接する。結婚して夫の父母と住むことになったお嫁さんは、長い人生を生きてこられたお年寄

りをいたわりたすける。こうすれば、家のなかは丸く収まるのです。国家社会のことだって、結局は家族と同じことで、お互いに立場を尊重して理解しあえば、もつと住みよくなるはずではないでしょうか。ブラジルは犯罪さえなければ、地震のような恐ろしいことのない良い国だと思えます。ところが日常的に惨い殺人事件が報じられ、冷たい社会になっていくというのはどうしたことでしょう。私たちが生きて来た六十余年、文明は急激に発達し、土地は開発され、日常生活は便利で豊かになりましたが、一方で過去に例のない大災害があちこちで起こりました。先だって起こった東日本大震災にはびっくり仰天しました。私は阪神淡路大震災のとき三重県上野市にいて、かなり離れたところだったのに、大揺れに揺れました。海はないので津波は経験していません。先日の東日本大震災の津波の様子はテレビで見ましたが、津波が引いたあとの惨状には息をのみました。この時、埼玉県にいる甥っ子がちょうど、石巻に集金に行つて、自宅に帰つて間もなくのことだったとかで、胸をなでおろしています。人間さまの能力はすごいけれど、大自然の威力はもつとすごい。それを今、全世界の人びとが見せつけられています。自然を破壊して築き上げた人間の文明はこの先どうなるのでしょうか。

それでは、「女の一生」を歌わせてもらいます。セリフは私が作ったものです。

「♩セリフ」

お母さん かあさん お母ちゃん 母ちゃん

どの言葉も とてもあったかい感じがします

この前、母の手を見たら あかぎれでいっぱいでした

髪の毛を見たら 白髪でいっぱいでした

長い間苦労して私たちを大きくしてくれたんだあって

感謝の気持ちでいっぱいなのです

てれくさくて 言えないけれど

ほんとうは心の中で 母さんありがとう

いつまでも いつまでも

長生きしてね

♪「女の一生」

一、負けちやだめだと 手紙の中に

しわくちやお札が 入った

晴れ着一枚 自分じや買わず

頑張る姿が 目に浮かぶ

お母ちゃん 苦勞を苦勞と思わない

あなたの笑顔が 支えです

二、俄雨なら なおさらのこと

自分が濡れても 傘を貸す

人のやさしさ 教えてくれた

背筋を伸ばした 生き方も

お母ちゃん 煮豆も根性で花咲かす

あなたの言葉を 忘れない

三、歳をとつても 働きどおし

女の一生 すり減った

楽になつてと 頼んでみても

いつでも笑つて 首を振る

お母ちゃん 一生懸命生きている

あなたの背中が 道しるべ



## 第十二章

弔辞 友人代表

子に先立たれるより悲しくて痛々しいことはないと言われますが、弟に先立たれることも、同じくらい辛く悲しいことに違いありません。

もうずいぶん前のことですが、みどりちゃんはいちばん下の弟さんに若くして先立たれています。その後お母さん、お兄さんと相次ぎ、今年の五月には妹さんが亡くなったところなのに、今日は弟さんのご葬儀になってしまいました。

人間、生身は順番に世にでてきますが、生きている間にいろんな出来事、トラブルに遭い、順番が狂ってしまいがちです。母親のおなかにいる時から、私たちの人生は決定されているものかもしれませんが、昨日は突然さだいけさんが亡くなり、きょうはまた、突然しろうさんが亡くなりました。私たちの年代の方がどんどんお亡くなりになり、とても悲しく淋しいばかりです。みどりちゃんは、お一人になられたのではなくて、地球の裏側ではあります。日本に妹のようの子ちゃんがおられます。遠い遠い日本ですが同じ青い空の下です。そのことを励みにして、くじけず気を落とさず、周りのお友だちみなさまに助け

られたり助<sup>たす</sup>けたりしながら、まだまだ続<sup>つづ</sup>く人生<sup>じんせい</sup>をしつかり歩<sup>あゆ</sup>み続<sup>つづ</sup>けてくださいね。  
おおいずみ家の皆<sup>みな</sup>様<sup>さま</sup>はとても兄弟<sup>きょうだい</sup>仲<sup>なか</sup>が良<sup>よ</sup>く、しろうさんもとてもお優<sup>やさ</sup>しいお人柄<sup>ひとがら</sup>でし  
た。きょうまで御<sup>お</sup>付<sup>つ</sup>き合<sup>あ</sup>いいただいて本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>にありがとうございました。安<sup>やす</sup>らかにお眠<sup>ねむ</sup>りく  
ださい。

二〇一一年二月二日、友人代表 広田亜起

## 第十三章

### 第一アリアンサ八八年祭 だいいち

第一アリアンサ八八年祭を迎えた。八八

年をさかのぼって、一九二四年の移住当初、

汗と涙の苦勞の日々を乗り越えてこられた

大先輩の實際の姿を、子どもの頃に昔語り

で聞いたことのある私たちは、次の世代の

子どもたちに伝えていかねばならないと思

う。重機もなく、斧二丁を手には大木の山林に

立ち向かう。男も女もなく、汗まみれ埃まみ

れ灰まみれ泥まみれの真つ黒。そのころの古

い白黒写真が残っている。この大先輩たちの

苦闘のおかげで私たちの今日があるのだ。そ

のことを忘れてはならない。感謝とともに思



アリアンサ村移住当初の木村賢一郎一家 (1924年)

い出す時が年毎の記念祭の日ではないだろうか。今の時代、すべてが便利になって、お金さえあればなんでも手に入る。そのことが心の持ち方まで変えてしまつてはいないだろうか。昔の人たちはすべて共同作業の中で収穫を分け合い、病気やけが人が出れば、代わりあい、いたわりあつて心ひとつに生きてこられた。その、信頼と互助の精神が今の時代には薄れてきているように思う。機械化で肉体労働が減つたうえに、ぜいたくな美食生活で、シユハスコ、セルベジャ、ジユラーダ・ア・ボンターデなど体に良くないものを楽しんで肥満、高血圧、インファルト、デハーメ、はては糖尿病などに苦しむことになる。

私の母は『病は気から』じゃない『病は口から』だよ』と口癖のように言っていた。その母は十二才のとき家族とともにノロエステ線アフェランジャのブラジル人ファゼンダに入植し、カフェエーザルの仕事を与えられたという。周りにいっぱい黒人がいて、笑うと真つ白い歯がむき出しになり、まるで怒っているようで怖かったと言っていた。ところが、入植後半年ばかりで父親が急死。あとに、女親と十二才の娘に二人の小さな男の子が残されるといふ不運に見舞われた。おそらく母はまだ若い祖母を助けて必死で働き、苦闘の連続の少女時代を過ごしたことだろう。

私の父は山梨県出身、実は移民船の中で、十二才の母に会って、母の家族は鳥取県出身で方言も違うし、親しく話すことはなかったかもしれないが、当時二十才だった父はひと月近い移民船暮らしでたった十二才の母にほれ込んでしまった。第一アリアンサ四区に入植した父は二八才の時、一念発起して船の中で出会った少女を探し始めた。カフエランジャの農園に家族ぐるみ雇われたということだけを頼りに日本人家族をしらみつつぶしに探し回ったが見つからない。それもそのはず母の母は夫が急逝したのち子連れで再婚して、姓を変えていたのだ。しかし、執念はやがてみのり、父は母を探し当てて、結婚した。母は立て続けに子供を産んだが、初めの二人は乳飲み子で亡くした。三人目は危機一髪助かったとかで、その後は順調に六人が成長した。私は第四子である。私たちが子供の頃、父は「上海帰りのリル」ばかり口ずさんでいた。父のロマンに満ちた母探しの旅など知らない私たちも覚えてしまつて、父と一緒によく歌った。仲の良い夫婦は一方が死ぬとすぐ後を追つて死んだ。父は、いろんな仕事に挑戦した。養蚕業、トラック運転手、自動車修理工場、綿栽培、マモナ栽培、薄荷製油工場、薄荷製造は戦時中にブラジル政府から製造禁止処分をうけたという。そのころ家にあつた薄荷の瓶入りを弟とバリニンヨ

スの叔母おばが一本いっほんずつ持もつていてという。弟あには、今いまでもたまにハツカ飴あめを作つくつて楽しんでい  
るといふ。

昔むかし、電氣でんきがなくて夜よるは石油せきゆランプだつた時代じだい、医者いしやがいないのでみすみす赤子あかごを死し  
せなければならなかつた親おやたち。朝あさはや早くからボンジーヤと鳴なきかわすにぎやかな鳥とりの声こゑに  
起おここされ、大木たいぼくを切きる斧おのの音ねが森もりの奥おくまで響ひびき渡わたり、それが山彦やまびこになつて返かえつてきた。暑あつ  
い夏なつは昼寝ひるねの時ときなど物音ものおとひとつしなないそんなときがあつた。夜よるは密林みつりんの奥おくで吠ほえる恐おそろし  
いけだものたちの遠吠とおほえに怯おびえた。卵たまごを採とるために飼かつてゐる鶏にわとりがきつねに襲おそわれて、ば  
たばたともがきながら森もりの中なかに引ひきずり込まれるのを私わたしも見みたことがある。冷蔵庫れいぞうこはな  
かつたが、父ちちが井戸いどからくみ上げてくれた水みずが冷つめたくておいしかつた。それを汲くみ入れた  
ドラム缶どらむかんの風呂ふろに入った。もちろん見み上げるように星空ほしぞらが広ひろがる露天ろてん風呂ふろだつた。  
蚊かにはさんざん刺さされた。蚊かはマラリア、マレイタ、風土病ふうどびょうを媒ばい介かいする。私わたしの一つ年上ひとつとしうえの  
兄あにもマレイタで亡なくなつた。母ははが必死ひつしで井戸水いどみずにぬらしたタオルを取り換かえていたのを思おも  
い出す。移住者いじゆうしやの中なかには、苦勞くろうの果はてに鬱うつを發症はつしやうして自殺じさつされた方かた、失意しつゐの末すえ日本にほんに帰国きこく  
された方かたなど、生活困窮せいかつこんきゆう家族かぞくも少すくなくなつた。開拓時代かいたくじだいの先輩せんぱいのことを忘れてはなら

ないと思う。

アリアンサは一九七〇年に電気が通り、一九七九年に電話が開通。そして一九八六年にアスファルトの道になった。学校教育も第一アリアンサに高等学校ができ、日本語学校も開校した。郵便局、ポスト・デ・サウデなどができ、便利になった。文化生活は騒々しい。道を走る車の音、テレビ・電話・洗濯機・扇風機・ミキサ・冷蔵庫・掃除機、何かがどこかで一日中うなっている。

親の苦勞話を聞いて育った私たち二世も高齢者の仲間に入ったのだから、昔の話を次の世代につなぐ責任がある。入植百年祭を迎える時まで、このアリアンサ村の昔を語り継ぎたいと思う。ただ、いちばん気になることは、若い人たちが、日本語を話さなくなっていることだ。三世四世の子らに「おばあちゃんと話す時くらい日本語を話さない」と叱ると「間違った日本語使ったら恥ずかしい」とポルトガル語で返事する。

今年も十二月の声を聞く時季を迎えた。毎年、どことなく気ぜわしさを覚えるこの時期に、入植記念祭が行われる。今年も第八八回、未広がりの八が並ぶめでたい数字。アリアンサの一層の発展を願って、二曲の唄の歌詞を紹介しておこう。ブラジル移民七十年記念

に二葉ゆり子さんが歌った。

「ああ…笠戸丸」と「暎の日本」。

「ああ…笠戸丸」

《台詞》ああ、あれから何年いいえ、何十年たったことでしょう。笠戸丸のデッキから万才、万才と声を限りに叫びつづけたのが、まるで昨日のこのようでございます。

一、行くも送るも 血を吐く想い

叫び続けた あの日の港

錦かざつて

帰る誓いの 真赤なテープ

波に千切れりや ああ ふるさとの

旗も泣いてた 笠戸丸

二、つらい長雨 つれない早

祈る両手を 突きさす夜風

意地をたよりに

他国ぐらしを 堪えて来たが

いつも偲ぶは ああ ふるさとの

祭り囃子 藁の屋根

《台詞》血の滲むような苦勞の毎日でございま  
した。桜の季節が来るたび、雪の便りがつくたび  
に、せめて一度一度だけでいい、この足でふるさ  
との土を踏んでみたい。しきりに思うのでござい  
ます。



移民船 笠戸丸

三、盆ぼんにや行いけるか 正月しょうがつころ頃ころか

樽うわさきくたび 心こころがうずく

遠とおくはなれて

積つもり積つもった 思おもいの数かずを

夢ゆめのふるさと ああ ふるさとの

山やまに向むかって ぶつけたい

「まふた 險にほんの日本にほん」

一、遠とおい遠とおい 日本にほんだけど

險まふたを合あわせりや 一いちつも日まるの丸まるが

一いちから数かずえて 八十八年はちじゅうはちねん

骨ほね身を削けずった 年とし月つきを

ブラジル 日本 万才

愛の花が今 きれいに咲いている

二、 遠い遠い 日本だけど

桜の季節は いつも偲んだよ

やるぞと決めたたら やりとげようと

涙はみんなで 分け合った

ブラジル 日本 万才

夢の花が今 きれいに咲いている

三、 遠い遠い 日本だけど

村の祭り見えました いつも偲んだよ

やるぞと決めたたら 星空に

この海続きが ふるさとなのと

この手を 波につけたっけ  
ブラジル 日本 万才  
愛の花が今 きれいに咲いている

## 第十四章

### 古希のお祝い

主人の弟、タケオ君の古希のお祝いによばれました。

私が一二才のとき、第三アリアンサから第一アリアンサ北米区へ引っ越した頃、ちっちゃくてもかわい顔をした男の子だったタケオ君が五七年もたった今日、病氣ひとつせずいいおじいちゃんになり、無事七十才を迎えました。小さい頃からおさな友達として私はタケオ、タケオと呼び捨てにしてきましたが、今回だけはちよっぴり *Respetia* して、かしまつてタケオ君と呼ばせてもらいます。

私も来年は七十才にもなりますが、タケオ君より一つ年下なのにクニヤードのタケオ君はいつも私を *Respetia* してねえさんねえさんと呼んでくれますので、私はそのたびにいつも、てれくさいやら氣まずいやら、申し訳ない氣持ちでおります。文協の會長わかもとあきおさんのおかげで、たいへん立派にへフオルマされているこの第一アリアンサの会館で、来年は私の七十才古希のお祝いをしようとみんなに言っていましたら、タケオ君にさきを越されてしまいました。一つ年下の私ですから、仕方ありませんよね。「来年の

ことを言え、鬼が笑うという」ことわざはこのことでしょうか。

今の時代は子どもたちの誕生日を毎年 Oburigaço のようにして祝ってあげるパパ・ママたちですが、私たちの子ども時代はそれどころではなかったのです。祝ってもらったことさえありませんでした。ですから、せめてこういう節目の年には祝ってもらっていいのではないかと思います。七十年も健康で、一筋に働いてきたんですから。

タケオ君はおだやかで、おおらかな人柄、そのうえ大へんお人好しで、困った人を見たら助けずにはいられないたちです。妹さん二人だけでなく、私まで含めて三人の Viva たちのめんどろをみてくれて、感謝あるのみです。

このめでたい席で、思い出すのは申し訳ないことですが、一人息子のエルロンを一二才にして病で亡くされたことは、ほんとうにお気の毒でした。「子に先立たれるより、悲しくて痛々しいことはない」と言います。肩を落としたタケオ君、のぶえさんのお姿にひしひしとそれを実感しました。ただ、今となってはそれも運命と言うものですし、長い人生のひとの経験として受け止め、立ち直っていたいただきたいと願わずにはいられません。若くして天国に逝ってしまったエルロンの分まで生き抜いていただきたいのです。しつかり者

の娘むすめのサンドラとその婿むこのカルロス、そしてかわいい二人ふたりの孫まごたち、彼らかれの成長せいちようを見守みまもつて、余生よせいを平穩へいおんに生いきていたのだと思いますおも。

わたしわたし私たちクニヤードどうしなかよ同士仲良くく暮くらしてきました。私もお二人みならを見習みならつてついていきたいとと思いますおも。本日ほんじつはおめでとうございました。

二〇一二年二月二三日



## 第十五章 よし子おばさまの九十才の祝い

突然のご指名で、戸惑つておりますが、一言お祝いのことは申し上げます。

皆様、こんにちは。サンパウロ州ミランドポリス市、第一アリアンサ植民地より、今朝はやくかけつけてまいりました木村アキと申します。よし子おばさまの姪の一人です。どうぞよろしくお願いたします。

よし子おばさま、お元気で九十才のご長命、ここからおめでとうございます。今日はこうして子供たち全員にかこまれ、幸せいっぱいの子おばさまを前に、わたくしを含めて、遠くから近くから、お集りいただいたみなさんすべてが幸せな気分になる、よき日でございます。

ひと言に九十年といいますが、一日一日が山あり谷あり川ありの険しい道のりではなかつたでしょうか。雨の日も風の日も暮らしを守るたたかいの日々、五人の子供さんたちを立派に育て上げられた、そのご苦労にここから敬意を表します。

人生は、しかし、生きている限り、前を向いて明日をめざす戦いです。よし子おばさ

まのそのお姿すがたが、私わたしたちに勇氣ゆうきを与あたえます。どうぞお体からだを大切たいせつにされて、さらにいっそう長寿ちようじゆを伸のばしてくださいますようにお祈いのり申もうし上げて、私わたしのつたない挨拶あいさつを終おわります。ありがとうございます。

二〇一四年九月二一日

## 第十六章

### 孫の成人祝い(2)

孫の成人式に、お祝いの手作りケーキを約束していただきましたので、この日を楽しみに、バスで二六時間かけてやってきました。ブラジル内陸部のトカンチンス州という遠い所に娘ナンシーが嫁いだとき、グルピ市はかなりの人口だけど、当時日本人が一人もいないということでとても心配でした。その後、日系家族がどんどん増えて、今はこんな風が集まって食事会をされている、暖かい雰囲気になんか安心しました。

私は日系二世、子どもたちは三世、孫は四世、ひ孫は五世となります。代が変わるにつれてブラジル化するのは仕方ないですが、何といつても私たちは日本人の子であり、子孫であることを大切にしたいと思います。

今日も初対面の日系家族がおられるので自己紹介させていただきましたが、私はサンパウロ州のミランドポリス市、第一アリアンサから来ました、広田・木村・亜紀といい、ナンシーの母親です、よろしくお願ひします。日頃はナンシー一家が大変お世話になっています。ありがとうございます。

私たちが日系人は出来る限りこうして集り、気晴らしをし、アイデアをかわし、わが子、孫、ひ孫、さらにその先の世代まで、わが祖国日本の言葉と、大切な仕来たりを伝えていかねばなりません。この世に生まれたものは誰でも親の元で育ち、教育され、周りの人びとや友人に囲まれる中で物事のよしあしを学び、独り立ちするのです。神様に感謝し、父母を敬い、目上の人びとに教えられながら世を渡っていくのです。

しかし、今の世の中は右のようなことが日に日に乱れていくように思われます。渡る世間は油断も隙もない、そういう時代が来るのかもしれないかもしれません。賢く生きて下さい。「二刻千金」、しっかりと勉強し努力し、立派な人になってください。

昔は健康が第一と言いました。しかし、今はお金が第一。お金がなければ健康も維持できません。お金が先か健康が先か。まるで卵が先か鶏が先か、みたいな話ですね。でもやっぱり、健康がまず第一なのです。心も身体も健康に、頑張ってください。この先、辛いこと悲しいことがあれば、このばあちゃんと言ったことも思い出して、人びとに愛される人物になってください。

ながながお話ししました。申し訳ありません。

(2014年9月27日)

## 第十七章

### 母の日

早いもので、年が明け、一月は行き、二月は逃げ、三月は去り、と時の流れは吹き去るかぜのように、私たちも容赦なく老け込むばかりですが、ありがたいことに今年も「母の日」を健康で「又」迎えることができ、この場で全員そろって「又」顔をあわせることができたという喜び。この「又」という言葉がどのくらい私たち生身にとって大切か。あと何年こうしてこうしてそろって「又」顔あわせできるでしょうか。これから先何回この「又」という言葉をくり返すことができるでしょうか。くり返していられる間、毎日を大切に生きていきたいものですが、一日一日が貴重なふしめとなつてまいりました。私たちにも子供時代はありましたし、青春時代も過ぎ、大へん親に苦勞をかけ、ひとなみに親元を巣立ちし、初めて親のありがたさ、親のほんとうの苦勞を實際に知ったのは、自分自身が子を産み子を育て、一人まえに育て上げた今ではないでしょうか。お母さん、母さん、幼い頃泣き虫で臆病で弱虫だった小さな私を大へんな苦勞をしてしつかりと一人まえに育ててくれた感謝の気持ちを込めて、今日は「お母さん」という歌を唄います。この歌を聞くと、

天国てんごくにいるあなたが、今でもじつと見守みまもつてくれている、そんなあなたの姿すがたが目めにうつり、とても身みにしみて来きます。あいにくカラオケがございませんので、大たいへん唄うたいにくいんですが、今日きょうはなまで挑ちようせん戦せんしてみたいと思おもいますが、この歌は大おほへん古ふるい、けれど大おほへんよい歌うたで、プロ歌手かしゅ「やしろあき」さんの歌なんです、今日きょうはあなたの娘むすめ、木村亜起きむらあきが感かん謝しゃの気持きもちちを込こめて唄うたいます。お聞ききください

お母かあさん

一、国くにをはなれて ひとりぼっち

暗くらい悲かなしい めにあつて

やつとわかった 親おやの苦くろ勞ろう

身みにしみましたよ お母かあさん

二、おなかこわすな かせひくな

雨が降る日は 傘になり

雪の降る日は ぬくもりを

あたためくれた お母さん

三、他人の幸せ うらやむな

他人に幸せ あげるような

心に花が 咲くのだと

教えてくれた お母さん

四、空を見上げりや 空にある

海を眺めりや 海にある

はても知れない やさしさの

マリアの像の お母さん



## 第十八章

### 父の日

皆様 こんばんは。昔、私たちが女子青年の頃から、母の日は盛大に祝ってまいりましたが、父の日は、個人的には家で祝っても、父はあまり目立たない存在だったのか、とくにはこの会場で祝うことはなかった。どうしてかなって、いつもふしぎなくらいでした。でも大事なこの父の日をこの場でこうして盛大に祝うようになっていたことを私は日本より帰国した時に知ってほっとしました。そして昔は母の日と言えば母だけという決まりかのように、今のように父の日も母の日も、こうして家族全員そろって素晴らしいあたにかいこの雰囲気は私には日本より帰国後のもう一つの安らぎでした。皆様、今日は父の日ほんとうにおめでとうございます。あらためて昔のことを思い出せば女子青年だった私は、母の日と言えばそれぞれが手作りの造花の赤いカーネーションをお母さんたちにささげ、もう母のいない方たちには白いカーネーションを…。

時代の流れで、あの頃のカーネーションもいつしか廃り、生き生きとした新鮮な生花：まっかな紅ばらのつぼみに変わり、現代の青年たちがお母さんたちにくばっている姿を見

て、私は大へん心を癒され、日本より帰国後のもう一つの大きな喜びでした。ずいぶん歳  
 いてしまつた現在の私たちですが、このように今日は十九〜二十才くらいだったあの頃  
 のそんな私たちの思い出を偲んで語つてみたのですが、今日のこの会場にはその頃の皆様  
 方がほとんどではないでしょうか…。たまには思い出してみるのもほのほのと懐かしいも  
 のですよ。あの頃とはすつかり時代も変わつてしまいましたが、今日はこの父の日をお  
 借りして、他界してすでに三六年目になる父を偲んでこの歌「父娘鷹」を唄つてみたいと  
 思います。お聞きください。

《はじめに亡き父へメッセージです》

母の愛は唄になるが、父の愛はきびしすぎて唄にならない。そうかな…つて考えなお  
 したが、目をつむれば、父のいろいろな顔が思い出されてくる。曲がつたことがきらいで、  
 だからきびしく、海のようなきびしさでいつも生きていた。そのくせ、ちよつぴり涙もろ  
 く、大へんお人よしで、こまつた人を見るとすぐに助け…。

大へん泣きむしでちよつちよかつた私をいつも庇つてくれた。そんな父を、私は大好き  
 だった。雨が降る…風が吹く…まじしきの中にあつてもいつも私は父の胸に抱かれあたた

かかった。あ…お父さん唄にならないといわれる父への唄を、まぎれもないあなたの娘、  
木村亜起…が感謝の気持ちをごめて唄います。「父娘鷹」。お聞きください。

「おやだかたか  
父娘鷹」

《セリフ》この世でいちばん悲しいことは父親との別れではないでしょうか…。  
帰れないけれども一度、昔に戻りたいと思う時があります。どんなに貧しくても昔  
のほうが暖かさがありません。

月 一、尿の吹き笛 身に沁む夜は

月のふる里 故郷が恋し

土産話は 一つの日でさる

飛んで帰って 詫びたいけれど

父親は故郷の 墓の中

二、父の手をひき 山道超えて

何度過った 村から村へ

泣いて一節 笑って三節

遠い涙の 幼い日々が

今は なつかし

今は なつかし あかね空

《セリフ》

私が幼い頃、父はどんな夢を見ていたのでしょうか…。

甘い黒豆ゆをしあわせそうにのんでいました。あの頃は世界中が貧しい時代でした。

三、嘘とじれば 故郷の風が

根性なしだと 私を叱る

演歌は演歌と 父親仕込み

ふたり揃って 唄った日々

夢が命の

夢が命の 父娘鷹

## 第十九章

### 金婚祝い

皆様 こんばんは。青木ご夫妻様の金婚式、あわせてあつし様の八十才のおたんじょう祝によばれ、道中、車にゆられながら、気持ちよくアリアンサからはるばるやってまいりました広田アキ：マウロくんのソグラ：ナンシの母でございます。どうぞよろしくお願ひします。一言に金婚式：八十才と簡単に言えますが、山あり谷あり川ありのけわしい道のりを雨の日も風の日も時には嵐の日も、いかなる日もご夫婦そろって仲よく六人の子供さんを取りっぱにして育てあげ、なみたいていではなかったことは、言うまでもないことだと私は思います。今でも健在で畑のお仕事にはげんでおられるそうで、ほんとうに頭が下がります。私たちに生きるありがたさを与えて下さり、感謝の気持ちをこめてこの大へんめでたいお祝い、まことにおめでとう…と同時にこの、大へんな道のりを無事に歩んでこられたこと、ほんとうにご苦労さまでございます。

めでたいこの場で悲しいことを申すのは失礼かと思いますが、ご兄弟六人の内の一人マウロくんといっしょになった娘、ナンシですが、がんばりやのマウロくんが大へんな

災難にみまわれ、車いす生活になつてしまい、マウロくんがかわいそうで、ほんとう身代わりになつてやりたいといつも私は言うのですが、まげずくじげずがんばっているマウロくんは「三人の子供たちがいるのでしおれてはいられない」といつも逆にはげまされていく私です。マウロくん、ナンシ家族の身の毎日お祈りしております。

私たち生身は生きる間にはいろいろな起伏…いろいろなトラブルを乗り越え又はいろいろな経験をつみ、一人前の人間として成長するのですが、私たちはそれぞれお母さんのおなかに宿された時から、一人々々の人生のすべては決定されていて、人間の力ではどうすることもできないものなのだと私は思います。ここでいい思い出として、私が日本へはじめて行くまえ…娘、ナンシに「いいかげんで早くナモラドさがしなさいよ」と言うとき「ママイ勉強がさき…」という返事。当時ナンシはリンスのオドントロジア大学に行っていました。それから二年後「ナンシ早くいいひとさがして結婚しなければ」と言うとき「ママイ仕事のほうが大事…今やとママイが苦労して仕送りしてくれた大学をがんばって卒業した自分は何とかしてそれを活かそうとしているのにナモラしている余裕はないわよ」という返事。その頃娘は二五才だった。

それからしばらく、ある日、突然「ママイに気に入られるかしらないけど、ナモラドみつけたのでママイいなくてもノイバドしてもいいかしら…」と日本にいる私に電話がかかってきたので私はうれしくて「自分の理想のひとならいいよ早くノイバドしなさい、結婚式の時にはかならず帰るから」とは言ったもののうれしさのあまり、ノイバドにとんで帰って来ました。ナンシは二七才になるうとしていました。いい婿さんに出会ってほつとした私は「ナンシ、ママイせっかく帰ってきているのだから、いっそうのこと、今すぐ結婚しなさい」というと「でも、せっかくママイが苦労してミランドポリスにコンストリーヨたててくれたのに」というので「いいじゃないの、仕事しながら夫婦生活したら?」と「うと」「そうじゃないのママイ、マウロくんはトカンチンスのひとなの」と言うので、「あらそうなの、それじゃこちらのコンストリーヨ、アルガしてトカンチンスへ行けば又なるとかなるから」と言つて結婚させ、トカンチンスへ引越の時はタケオくんの車でコンストリーヨのエキパメントをつんで私もついて行き、こうして娘次女をやつと嫁がせた。新たな人生の出発を踏み切つた娘が引越した当時のグルピーという町には日本人一人の顔も見えないさびしそうなようすでした。それにもかかわらず私は「これでママイも一安心し

たので又ひと頑張り日本へ行くからね」というと娘はポロポロ涙を流し、ママイにだきつき声を殺し泣いているので「ナンシ自分で選んだみちだ、決めた以上成功するには強い人間にならなきゃ、度胸、人情でつらぬくんだよ、泣いている場合ではない、しつかりがんばりなさい、ママイも日本でしつかりもうひとがんばりしてくるから」と心を鬼にして娘と別れた瞬間、どうどうと流れる涙を私はぬぐいながら帰路に向かいました。そんな思い出をいつか皆様にお伝えしようといつも思っていました。六人の息子さんをしつかり育てあげたあつし様すみ様、今日はその息子さんたち全員に見守られ恩返しこのめでたい大切な日、あらためて私もご苦労さま、そしておめでとうとこの一言を私のあいさつにかえさせていただきます。これからお体だけは大切に長生きなさってください。ありがとうございます。

二〇一六年一月二日 マットグロツソ州カンポベルデ市

## 第二十章

### 言葉づかい

私たち日系ブラジル人は大和純粋の子でいるおかげで日本語、ブラジル語、両語ができて、大へん都合よく幸せな立場にあります。けれど、ことにより、時により、人により、場合により、言葉づかい一つで大へん失礼に、又は迷惑すること、恥をかくこと、そして非常におもしろいこともあれば気まずかったと言うこともよくあるものです。両語ができていいおかげに、私たちはやたらに日本語、ブラジル語をませこぜにしやべるので、先日こういうことがありました。

① この七月十五日にサンパウロの息子夫婦の家に一週間…、そして、二二日はトカ  
ンチンスへ一ヶ月の予定でバスの旅を計画し、私は家を出かけました。七月ですので乾季  
というのに、息子の所にいた一週間というものは、すごい寒さとともに毎日雨が降りつ  
づき、トカ  
ンチンスの旅のため、テルミナル、ロドビリア、チエテまで連れて行つてもら  
うことが心配で夜も眠れなかったしまつ。けれど、私たちが口ぐせのように言う「グラッ  
サス・ア・デウス」（さいわい）、旅行当日は朝起きると雲一つないスカッとした晴天に

めぐまれ、私は嬉しくて思わず息子に「アインダ・ベン・ケ・オジエ・天気いいね…」と日本語、ブラジル語ませこぜに言うのと、息子は表情を変え、「ポルケ・ママエ、オジエテンキイイ…?」と言うので、私は息子何を言っているのかと思ひ、「エツ」と言う、「よかつたらママエ一ヶ月でも二ヶ月でも、いくらでもここにいていいんだよ」と言うので、私は「あーそうか…なるほど、言葉づかい一つでこういうことになるのか。気をつけなければ」と一つ勉強になりました。「ママエは、今日は天気がよくてよかつたと言ったのだよ」と言うのと、納得してくれて大笑い。ブラジル人たちがよく「サイオナラ」という言葉をつかうので、それは『さよなら』のまちがいよ」と言う、「それじゃ、サイオナラはどういう意味か?」と聞くので「ブラジル語でサイは『出る』という意味だから、日本語の『オナラ』とくつつけたら、『屁が出る』ということだよ」と言う、「いやーだ」と大笑い。「どうして屁が出るんですか?」と嫁が聞くので、なお面白くなり、「下品な言葉だけれど、だれでも『屁』が出なくなったらおしまいだよ」と説明すれば納得。

② 尊敬語・丁寧語

「あんたたち日本語で『あんた』という言葉わかりますか」と聞くと「ノンセイ」と言

うので「あんた E VOCE」と説明してあげると「エウ・ノン・ソウ アンタ」とおこるの  
です。「『あんたがアンタ』とは私は言っておりません」。「日本語であんたは『あなた』とい  
う言葉の俗っぽい言い方で、『あんた』は VOCE, 「あなたは SR=SRA: なんだよ…」と言  
うと、なんかわかったようなわからないような複雑な表情なので、もつとくわしく説明す  
れば「ブラジルに住むあなたたちはブラジルの山に住む鼻先をくりくり回す大きな動物：  
そのアンタを想像するので『アンタ E VOCE』とばかり思っているのでしょうか。とんで  
もありません。山のアンタはこわい動物で触らぬ神に祟りなし。ちよつかい出せば、破竹  
の勢いでかかって来る、ブラジルの山の動物がアンタなんですよ」「私あんたを『アンタ』  
とは言っておりません」。

言葉づかいでもつとも気をつけなければならぬのは、他人さまとの会話。日本語に  
もブラジル語にも敬語、尊敬語、ていねい語、いろいろあります、「あんた、あなた」のよ  
うに。

私が日本に十一年半滞在中、日本で知り合った日系出稼ぎの友人たちと目上の方々

との会話をよく耳にしましたが、聞いていて恥ずかしい、聞いた方にふゆかいな感じをあ  
たえるような言葉をよく聞きました。日系三世四世にもなればやはり、日本語を大層学ん  
だ子ならともかく、家内でふだん「そうだろう、だから、これなんだ」では親や教師の方々  
が「他人さまとの会話の時は気をつけなさい」と教えなければ無理もない。「社長、おれ、  
これ持って来たぞ」というようなことになりがちです。自分の子どもたちもたちもどのよう  
な口調か、最近永い間いっしょに暮していませんが気をつけさせねばと思います。そういう  
自分も、たまに、特に腹が立った時などはとんでもない言葉を「ぶっ放す」が、もちろんお  
んなですから冗談で書いているんですが、だいたいこの「おんな」という言葉も女子とか  
女性といえは上品でとてもできた人間になるはずではないでしょうか。

他人さまの前では、できるだけ言葉づかいに気をつけたいものです。

## 第二十一章

### 私たちの誕生日

あれからちようど一年になります。去年の十一月二二日に、この場でおこなわれた全アリアンサ紅白歌合戦のうちに、私とアリアンサ日本語学校の若林よう子先生の誕生日祝いケーキをしようじ様よりいただきました。うちのだんなさんからもプレゼントなどしてもらったことのない私は、突然でびつくりするやら嬉しいやら、ありがたいやらで、ケーキをいただいた以上は仕方なくもう一つ歳をとらなきやならなかったのですが、そのお返しも、お礼の一つもしないうちに、ほんとうに恐縮ながら、また、今年もこうして誕生日ケーキをしようじ様よりいただいてしまいました。今日のこのパーティーは、おおばあきら先生をはじめ、やざきのぶかつさん、そして私…。三人の誕生日を祝っての夕食を兼ね、しようじ様のアイデアで行っているんですが、ただのありがとうだけではすまないことです。が、しようじ様うめよ様、今年もまた、まことにありがとうございます。また、ケーキをいただいた以上は、又もうひとつ歳をとらなければならぬということですよ。

個人的な話になりますが、こんな私は四十代には四回も毎年続けさまに大手術をし、

そのあと弱い体で子どもたち全員の大反対を押し切って日本へ出稼ぎに立ち、日本で十一年半滞在中幸い病氣一つせず帰国。それから十年経った二〇一二年と二年後の二〇一四年にまたも二回の大手術。他にも軽い手術を二回。合わせて八回も手術を受けながら、よくぞここまで生きてこられた。みなさまに囲まれて生きて来られたありがたさを、心から感謝している次第です。

このようなありさまで、当時生活もどん底で苦しく、華奢な身体で仕事でもそうとうな無理をし、なんとか子供たち四人を育て上げ、今日に至る私ですが、現在は気ままな誰に遠慮・気兼ねすることもない人生の終幕を迎っています。私にとっては今がいちばん潮時、今がいちばん大切、今がいちばん花、今がいちばん幸せ。日本から帰る時、男性の唄ですが「人生半分五十で始まる夢もある」という唄が大ヒットしていましたが、ちょうど還暦の歳で帰国した私には帰国と同時に辛さ、悩みからいつさい解放されました。私の人生半分は六十ではじまりました。

帰国後さっそく再びカラオケクラブに仲間入りさせていただき、久しぶりに我に返り、幸せいっぱいの日々を送っている今の私です。私たち第一アリアンサカラオケ会は、私が

日本へ行く前はいつも審査員をつとめてくださったにしろみふみひろさんをはじめ、しゅうじあきらさん、たけはらゆきおさん、たかぎとしかずさん、いでただしさん、なかつかさ、たなかおさむさん、やまざきみつあきさん、まるやまひろ子さん、わかぐりたく子さん、おくいご夫婦さん、はすぬまよしひこさん、こんどうさん、いろかわはじめさん、はすいけマリオさん、あさのあきみさん、私……。ほかにも今では頭に浮かばない方たちも数えて二十人からの人数で、毎週練習をしていましたが、その中で引越された方、亡くなられた方々、やめていかれた方々があつて、最近ちよつと前までは長い間しゅうじさん、たけはらさん、女性では私一人だけの三人きりになり、世間体を気にして、私もよほど止めようかと一時考えたのですが、たつた一つしかない趣味のカラオケを止めたら私の人生は終わりになる、生きていく意味がなくなる、カラオケは私の生き甲斐なのだと考え直して、何が何でも自分なりにカラオケ世界をつらぬいてきました。ノロエステ大会などに行くと友達がいらない私は、「あんたしゅうじさんの奥さん？」とか「はらさんのおくさん？」とか聞かれる気まずいこともあります。最近、しゅうじさんが「二十人集まらなければアリアンサ大会も止めにしよう」と悲しいことを言われるので深刻に心配しています

た。でも、火の消えそうだった第一アリアンサカラオケ会に、第二アリアンサからほそだご夫妻、第三アリアンサからはいのうえくにおさん、やぎのぶかつさんが練習日にきていただいているおかげで、いきをふきかえしました。みなさまほんとうにありがとうございます。

やはり大勢の方がおられると張り合いがあつて楽しいですね。

それと、忘れてならないのは音響係のしようじ様。しようじ様いがいにはきかきを操作する方が第一アリアンサにはいません。しようじ様お体を大切にしてくださいね。それからもう一つ、しようじ様のおくさま、いつもかかすことなくおいしいうめ茶を持ってきてくださいます。うめよ様のうめ茶で、幸せな気分になつて練習にはげみます。しようじご夫妻様ありがとうございます。

二〇一六年十一月十七日 第一アリアンサカラオケ練習日にて

## 第二十二章

### 秋彦さんへ

あきひこさん、いつも元気で忙しくしておられて、うらやましいですね。やはり人間は  
気が無くなったら、この娑婆に生きる価値はないですよ。一つ年下の私ですが、持っ  
て生まれた運命で四十代のころから健康的に悩まされ、毎年続けさまに腎臓、子宮がん、  
腸ねん転、内痔などの大手術をしました。当時農家をやったので相当な無理をしながら  
畑しごとをしてきました。

その後おやじさん(夫・広田力)の大借金のために必要に迫られて、弱い身体で、兄弟  
子供たちの反対を押し切って、父母の祖国日本へ出稼ぎにたち、意地と度胸のおかげで  
11年半滞在しました。幸い日本にいる間は何事ありませんでした。ところが、無理が  
たつたのか帰国後、また四回もいろいろな手術をしました。去年はいきなり高熱が出て  
うなされ続け、原因が血液にバクテリアが入ったとのことで十日間も入院しました。よく  
ぞこの歳まで執念深くも生きて来たものだと思ながら不思議です。

今は、娘マルリがフェイラに出品する料理をあれこれ作ってやっていますが、それが  
最近のコロナウイルス感染症騒ぎで、ブラジル中のお店、マルリたちのフェイラまで閉鎖

され、老人の外出まで禁止。今にも戦争が起きそうな雰囲気、コロナで死ぬ人がどんどん増え、食料品が無くなってきた。コロナで死ぬ人より飢え死にする人の方が多くなるのではないかと思うほどです。これがいつになれば収まるのか生きている心地がしません。

秋彦さんに私の文章を直してもらっています。ご迷惑をおかけして申し訳ないです。私が育ち盛りの頃、アリアンサ村に日本語学校はありませんでした。ブラジルの公立学校すらありませんでした。私たちは家の中で親たちが話す日本語会話だけで育ちました。全くの無字。言葉の意味も漢字を読むこともできませんでした。書くことが好きな私は、そのことがとても悲しくて四十代になってから辞書を買、寸暇を惜しんで勉強し、生まれて初めて書いた文章が「楽しい団体旅行」（第二章）なのです。その旅行の時、私は帳面と鉛筆を手に、見るもの聞くこと感じたことをすべて走り書きにメモして、家に帰ってから辞書を頼りに文章にしたのです。漢字の使い方、かなふりなど間違いだらけだろうと思いますが、秋彦さんが修正して本にまとめて下さるので、うれしくてうれしくて、その出来上がったものを見るのが今は最大の生き甲斐です。

(2021年2月10日消印)



広田 亜起(ひろたあき)

1943年11月17日ブラジル移民日系  
一世 木村三雄と窪田貞子の三女として  
サンパウロ州プロミンソン市に生まれる。

1962年 日系二世の広田力(つとむ)  
と結婚。二男一女の母となる。

父母の入植地サンパウロ州アリアンサに  
在住。

---

広田亜起 文集

二〇二二年八月一日 発行

著 者

広田亜起

発行者

檜山秋彦

発行・印刷

株式会社 ヤマプーラ

---

〒 523-0806 滋賀県近江八幡市  
北之庄町 742-5  
檜山秋彦  
Akihiko Hiyama  
742-5 Kita・No・Shyo-Cho  
Omihachiman City  
Shiga-Ken Japón  
〒 523-0806

-----  
Aki Hirota  
cx:Postal 526  
Rua Tooru Kamijo 1½ Aliança  
Mirandopolis S.Paulo  
BRASIL  
Cep. 16830 - 000



The Autobiography of  
Aki Hirota